

平成26年度 勤労青少年の国際交流を
活用したキャリア形成支援事業（厚生労働省委託事業）

Global ACE
Global Action for Careers and Employability

海外体験を生かした キャリア形成 事例分析

[平成26年度版]

平成27年3月



一般社団法人 海外留学協議会

はじめに

当事例分析は、一般社団法人海外留学協議会(以下、JAOS(ジャオス)と呼ぶ)が平成26年度に厚生労働省から委託された事業『平成26年度勤労青少年の国際交流を活用したキャリア形成支援事業』(通称「Global ACE (Global Action for Careers and Employability)」)で、海外インターンシップやワーキング・ホリデー、語学研修などの海外就業体験をする若年者に対して、渡航前から帰国後まで実施したキャリア・コンサルティングの事例を分析したものです。

2年目となりました当事業では、1年目の経験を活かし、支援対象者のエンプロイアビリティ向上に資するサポートをしてまいりました。

今年度の事例分析では、当事業のサポートを経て就職に至った好事例やその後の就業状況などについても触れ、昨年度の事例分析に比べ、より就職を意識した内容といたしました。

昨年度と併せて今年度の事例分析も、海外就業体験に関わる関係者の皆様にとつて何かしらご参考になれば幸いです。

本書の刊行に際し、多くの関係各位に多大なご支援・ご協力を賜わりましたことを厚く御礼申し上げます。

平成27年3月

一般社団法人海外留学協議会(JAOS)

もくじ

5

第1章

目的と概要

10

第2章

海外体験と エンプロイアビリティ

15

第3章

Global ACE の キャリア・コンサルティング

23

第4章

コンピテンシー向上の秘訣

33

第5章

成長のプロセス

53

第6章

就職成功までの軌跡

69

第7章

相談事例、反省事例

80

第8章

総括

85

補足資料

用語集

用語	解説
海外インターンシップ	主に若年者が有償・無償に関わらず、海外の企業やNPO、教育機関などでの仕事を体験することの総称。
ワーキング・ホリデー	青少年が渡航先国の文化などを理解するための概ね1年間の滞在と、その滞在費を補うための就労を認める相互協定。現在12カ国との協定がある(2015年3月現在)。
海外就業体験	ワーキング・ホリデーや海外インターンシップ以外にも、就業体験できるビザ(制度)があり、それらの総称。
海外渡航支援機関	留学、ワーキング・ホリデーや海外インターンシップ、語学研修などのサービスを提供する留学エージェントや旅行業者などの機関。
TOEIC	主に日本と韓国の企業で英語力測定の基準となっているテスト。採用試験でスコアを問われることがある。満点は990点。
キャリア・コンサルティング	「個人が、その適性や職業経験等に応じて自ら職業生活設計を行い、これに即した職業選択や職業訓練等の職業能力開発を効果的に行なうことができるよう個別の希望に応じて実施される相談その他の支援」のこと(引用:平成19年度厚生労働省「キャリア・コンサルタント制度のあり方に関する検討会」報告書)。
ジョブ・カード	履歴シート、職務経歴シート、キャリアシートなどからなるファイルのこと。記入したジョブ・カードをもとにキャリア・コンサルティングを受けることで、自分の職業能力・職業意識やキャリア形成上の課題が明確となり、就職活動やその後の安定雇用に役立てることができる。厚生労働省HPからダウンロードできる。
コーチング	「傾聴」「質問」「承認」などのコミュニケーション技法を用いて、若年者の意欲・能力を引き出す手法。当事業では渡航前～帰国後まである程度の期間にわたり、担当のコンサルタントが寄り添いながら当人の能力を引き出すサポートをするため、コンサルタントの支援を“コーチング”と呼んでいる。
一般社団法人 海外留学協議会 (JAOS)	留学手配会社、大使館、語学学校など、広く留学に関わる者が集まり、諸問題の解決と安心できる留学の実現を目指す団体。

第1章

目的と概要

1 背景

少子高齢化に伴う国内市場の縮小や、事業のボーダレス化の進展により、大手企業を中心にますますグローバル化が進むなか、中小企業などでも海外展開の必要性が高まってきている。しかしながら特に中小企業では、海外で事業展開を担える人材や、国内でも海外に関わる業務を担える人材が不足しており、グローバル人材への求人ニーズが今後一層高まることは必須である。

その一方で、海外就業体験をした若年者の雇用状況は必ずしも良好であるとは言い難く、平成25年度厚生労働省委託事業『海外就業体験が若年者の職業能力開発・キャリア形成に及ぼす影響・効果に関する調査研究』の報告書(以下、「H25年度調査」)によると、海外就業体験が就職活動に有利になったと答えた割合は43.7%程度であった。

しかしながら、平成26年度厚生労働省委託事業『海外就業体験が若年者の職業能力開発・キャリア形成に及

ぼす影響・効果に関する調査研究』の報告書(以下、「H26年度調査」)では、海外就業体験を職場で発揮している者は約7割に達し、業種や職種も問わないことが明らかになっている。つまり、海外就業体験者と企業の双方の意識が変わることで、より有効なマッチングが実現できる可能性が高いと言える。

2年目となる『平成26年度 勤労青少年の国際交流を活用したキャリア形成支援事業[通称「Global ACE (Global Action for Careers and Employability)」]』では、1年目の経験や調査研究の知見を活かし、海外インターンシップやワーキング・ホリデー、語学研修、ボランティアなどの海外就業体験のある若年者に対して、その経験を活かした就職を実現できるよう、渡航前から帰国後までの一貫したキャリア・コンサルティングを実施した。

2 目的

当事例分析集では、上記背景のもと、Global ACEで実施されたキャリア・コンサルティングの事例をもとに、企業が求める人材に必要とされる能力・資質をどのように習得し、エンプロイアビリティを高めたかについて分析を試みた。

その目的は、渡航者本人のみならず、若年者を海外へ送り出す側や、帰国後に採用する側、キャリア・コンサルタントなどを対象に、グローバル人材育成や若年者の雇用創出につなげる一助となることである。

3 本誌の構成

当事例分析集は以下の構成となっている。



4 海外就業体験とは

海外で就業体験をするアプローチは様々あるが、大前提として、Global ACEが主な対象とする海外インターンシップとワーキング・ホリデーについて概要を紹介する。

1. 海外インターンシップ

インターンシップ制度は、元々米国で発足したCOOP教育(Cooperative Educationの略。产学連携による実践的なキャリア教育の方法論)に由来し、大学内だけでなく、産業界と共同で優秀な人材の育成を図る趣旨で始まったものと言われている。一般的に欧米の学生は、在学中に自らの将来のキャリア育成や志望する企業の実態を学ぶ目的でインターンシップ(企業研修)を経験している。また、欧米社会においてはインターン活動に対する認知度も高く、多くの大学や教育機関でカリキュラムの中にインターンシップが組み込まれており、インターン活動終了時には正式な単位として認定されている。また、就職活動においても、学生にとってはこれから就職する職場や仕事内容を経験する場として、企業にとっても学生の採用活動の一貫として重視されている。

一方、日本におけるインターンシップとは、「経済構造の変革と創造のための行動計画(平成9年5月閣議決定)」による定義を踏まえ、平成9年9月に文部省、通商産業省、労働省(当時)が取りまとめた「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」において、インターンシップを「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」として幅広く捉えることとしている。

近年、日本でもインターンシップに対する認知度が高まっており、インターンシップを希望する学生数、受入先側の企業数共に年々増加している傾向にある。また、こうしたインターンシップに対する期待は、産業界と教育界が人材育成における横断的課題や業種・分野的課題などについて幅広く対話をを行い、具体的な行動につなげる場として、平成19年10月に「産学人材育成パートナーシップ」が創設されるなど、徐々にではあるが欧米型の制度へ移行しつつある。

(1) 海外インターンシップ制度について

世界における日本の担う役割が年々高まるなかで、国際社会における実務経験を持つ人材のニーズは高ま

りつつある。これまで海外における実務経験と言えば、外資系企業への就職や海外駐在員としての派遣などが一般的であったが、より身近な方法として海外インターンシップが注目されつつある。海外でインターンシップ活動を行っているインターンの実人数については、現在までのところ公的な調査はなされておらず、統計資料が存在していないため不明である。しかしながら、海外の大学を卒業した日本人学生が、卒業後インターンシップ生として海外の企業で研修を積むケースが増えており、国際的に学生インターンを促進するボランティア活動の活性化、留学エージェントが提供する海外インターンシッププログラム参加数増加の傾向を考え合わせると、全体として増加傾向にある。また学生以外でも、一旦日本で就職した社会人が自らのキャリア開発のために、会社を辞めて海外の企業や団体で実務経験を積むというケースも近年増加する傾向が見受けられる。

(2) 海外インターンシップ制度の内容

海外インターンシップは、その活動場所に応じて次のように類別できる。

- ① 一般の企業において
インターン活動を行うもの
- ② NPO団体やボランティア団体などの
非営利団体でボランティア活動を行うもの
- ③ 海外の学校で日本の言葉や文化を
日本語教師アシスタントとして教えるもの

①については、企業によっては優秀な人材を事前に確保するひとつの手段としてインターン制度を捉えており、この場合、優秀なインターンはインターン期間終了後に受入先企業／団体から労働証明書の取得支援を受けることで、正社員としての雇用につながるケースも存在する。また、インターン先によっては活動内容によって給与を支給する場合もあるが、現地で給与を受け

る場合には、渡航前に報酬を得ることが可能な査証を取得しなければならない。

②、③については基本的に無報酬での活動が原則となる。したがって、現地の活動中に発生する生活費については自ら賄う必要があり、費用がかさむケースが多い。なお、受入先によってはインターン活動中の住居について、社宅を無償で提供したりホームステイ先を紹介したりする場合もある。

2. ワーキング・ホリデー

ワーキング・ホリデー制度は、2国間の協定に基づいて、それぞれの国の青少年(多くの場合18~30歳)が、原則として最長1年間異なった文化のなかで休暇を過ごし、その間の滞在資金を補うために付随的に就労することを認める特別な制度である。「ホリデー」の名が示す通り、一種の休暇制度ではあるが、多くの場合、資金の乏しい青少年が1年間にわたって外国で生活するためには、一定の収入が必要であることから、旅行、滞在などのための資金を、現地で働きながら獲得することを認めているものである。それぞれの国の労働市場への影響を配慮しつつ、就労をも認める意味で、特別な制度として送出国と受入国の2国間で協定している。

したがって、この制度は観光や留学、就業などと区別しての入国、滞在などを認める特別の査証(ワーキング・ホリデー査証)の発給により実施されるものであり、その要件などは2国間で隨時決定される。

このように本制度は、2国の青少年を長期にわたって相互に受け入れることによって、広い国際的視野を持った若者を育成し、ひいては両国間の相互理解、友好関係を促進することを目的としている。

(1) 対象国

わが国政府は、ワーキング・ホリデー制度が特定国との青少年交流促進のために、相手国の文化、生活実態などを理解する機会として有意義であるとの判断から、1980年にオーストラリア政府との間で協定を締結したのを皮切りに、85年にニュージーランド、86年にカナダ各政府との間で協定を締結し、以来30数年の間、この3ヵ国との間でワーキング・ホリデー制度を実施してきた。その後1999年に韓国とフランス、2000年にドイツ、2001年にイギリス、2007年にアイルランドとデンマーク、2009年に台湾、2010年に香港、2013年にノルウェーと協定が締結され、現在では12ヵ国で実施されている。

なお、わが国とイギリスとの協定では、発足当時、ワー

インターンシップはアルバイトと異なり、賃金の獲得が目的ではなく、あくまで実務を通して経験を積むことが目的であるため、一般的には無報酬となるケースも多い。現地で活動中に必要となる資金については、事前に十分に準備しているかどうかが目的の成否を左右する。

キング・ホリデーによる労働市場への圧迫がイギリス国内で問題視されていたことや、既にイギリスには英連邦諸国を対象としたワーキング・ホリデー制度が存在しており、それと区別する必要上、ワーキング・ホリデー制度との呼称は使わず、YES[Youth Exchange Scheme]の略。現在はYMS(Youth Mobility Scheme)と改名]との呼び名のもとに、滞在可能期間1年間(現在は2年間)、年齢は18~25歳(現在は30歳まで)の制度として発足した。

この制度の所管は、出入国管理の観点から法務省が、在外邦人保護の観点から外務省が、さらに勤労青少年を中心とした青少年対策の観点から厚生労働省が管轄しており、3省の共管となっている。

(2) 制度利用者数

わが国この制度利用者は、査証発給数でみると年々増加しており、ここ数年、年間約2万人、累計では約40万人が渡航している。

渡航先の国別では、オーストラリアが毎年約7,000~10,000人で最も多く、次いでカナダの約6,000人、ニュージーランドの約3,000人となっており、その他の国々は人数制限もあってそれぞれ100~1,000人となっている。

他方、来日青年は2012年に約9,300人、累計約13万人となっている。来日青年の出身国では、韓国の約5,000人が最も多く、次いで台湾、オーストラリアがそれぞれ約1,600人、約600人、それに次ぎフランス、イギリスが400~500人、カナダ、ドイツ、香港が約300人と続いている。

わが国の場合、ワーキング・ホリデー査証での出入国の数が同数でなく、韓国を除き、各国とも日本から渡航する者の数が、来日する者の数を大きく上回っているのが特徴である。

また、年間の査証発給数に制限のある国もあり、わが国との関係では、カナダ6,500人、英国1,000人、アイルランド400人、台湾2,000人、香港250人までとなっている。

第2章

海外体験と エンプロイアビリティ

1 概要

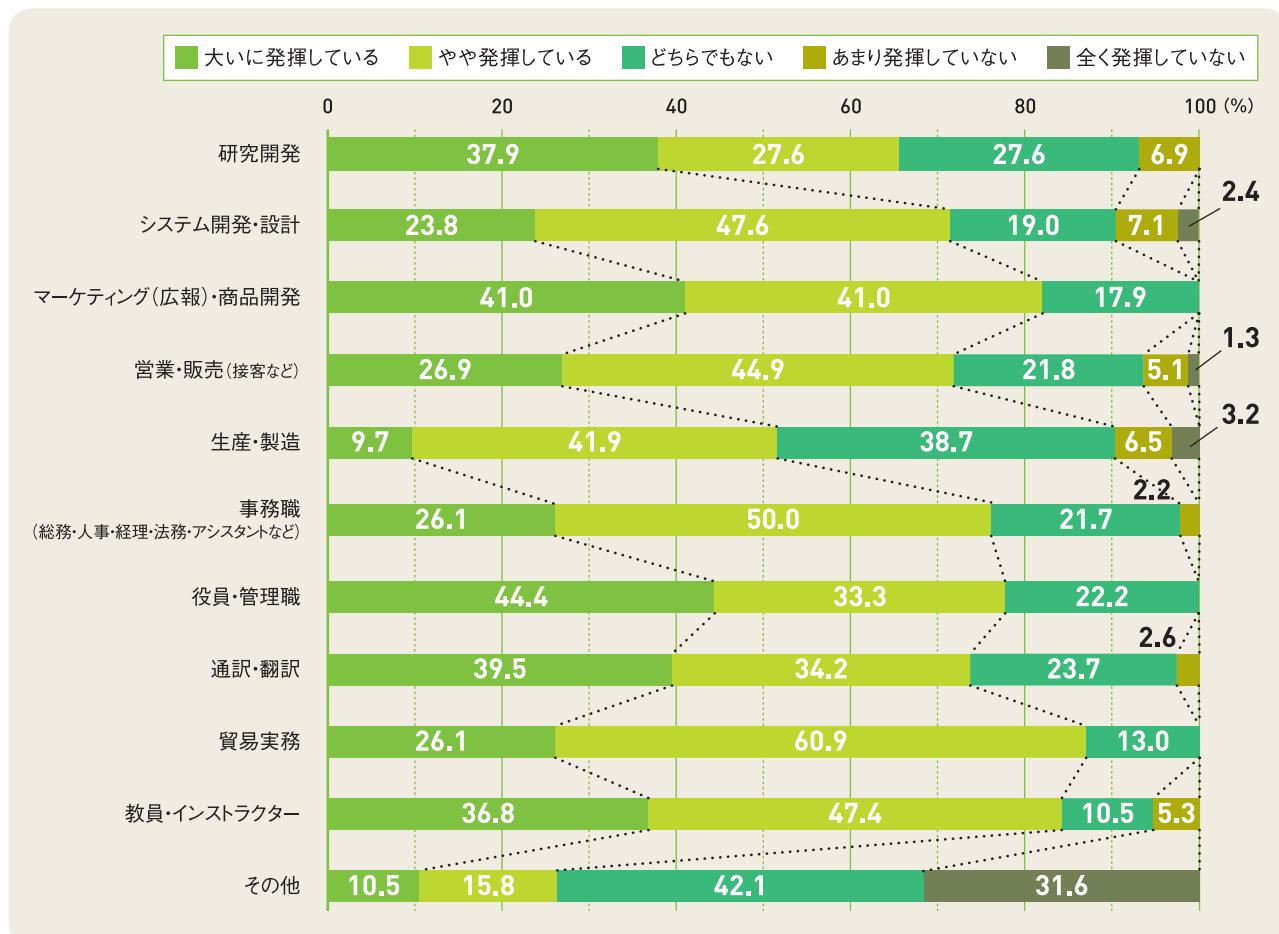
海外体験がどのようにエンプロイアビリティに寄与するかについて、平成26年度にJAOSが厚労省から委託された『海外就業体験が若年者の職業能力開発・キャリア形成に及ぼす影響・効果に関する調査研究』(以下、H26年度調査)の結果や、EUが実施しているエラスムス(ERASMUS:European Region Action Scheme for the Mobility of University Students)プログラムという交換留学制度の評価レポートを紹介する。

2 H26年度調査の結果

海外(就業)体験が、帰国後の就職活動や就業にどの程度活かされているかを把握するために、H26年度調査では、海外就業体験者の雇用実績(または雇用意向)を有する企業向けと、海外就業体験者自身へのアンケート調査を実施した。

1.企業の視点

国内328社の人事に関わる責任者(経営者も含む)へのアンケート調査のなかで、「海外就業体験者が海外体験をどの程度職場で発揮できているか」という設問への回答では、以下の通り、どの職種でも半数以上が発揮していることが明らかになった(海外就業体験者の採用実績がある172社の回答)。



さらには、「研究開発」「生産・製造」以外の職種では、発揮しているとの回答が70%以上にのぼり、あらゆる職種で海外体験が発揮されていることがうかがい知れた。

また、海外就業体験者が同世代と比較して優れていると思われる能力・資質（合計21項目）に関しては、半数以上の企業から優れていると回答されたものは以下の通りであり、「採用時に重視する能力・資質（合計21項目）」の上位項目と多くが合致していることがわかる（調査対象328社の回答）。

海外就業体験者が同世代と比較して優れていると思われる能力・資質

- ① 語学力（71.9%）
- ② チャレンジ精神（66.8%）
- ③ 異文化適応力（64.7%）
- ④ 好奇心（63.7%）
- ⑤ コミュニケーション力（61.9%）
- ⑥ 実行力（59.8%）
- ⑦ 主体性（59.1%）

採用時に重視する能力・資質

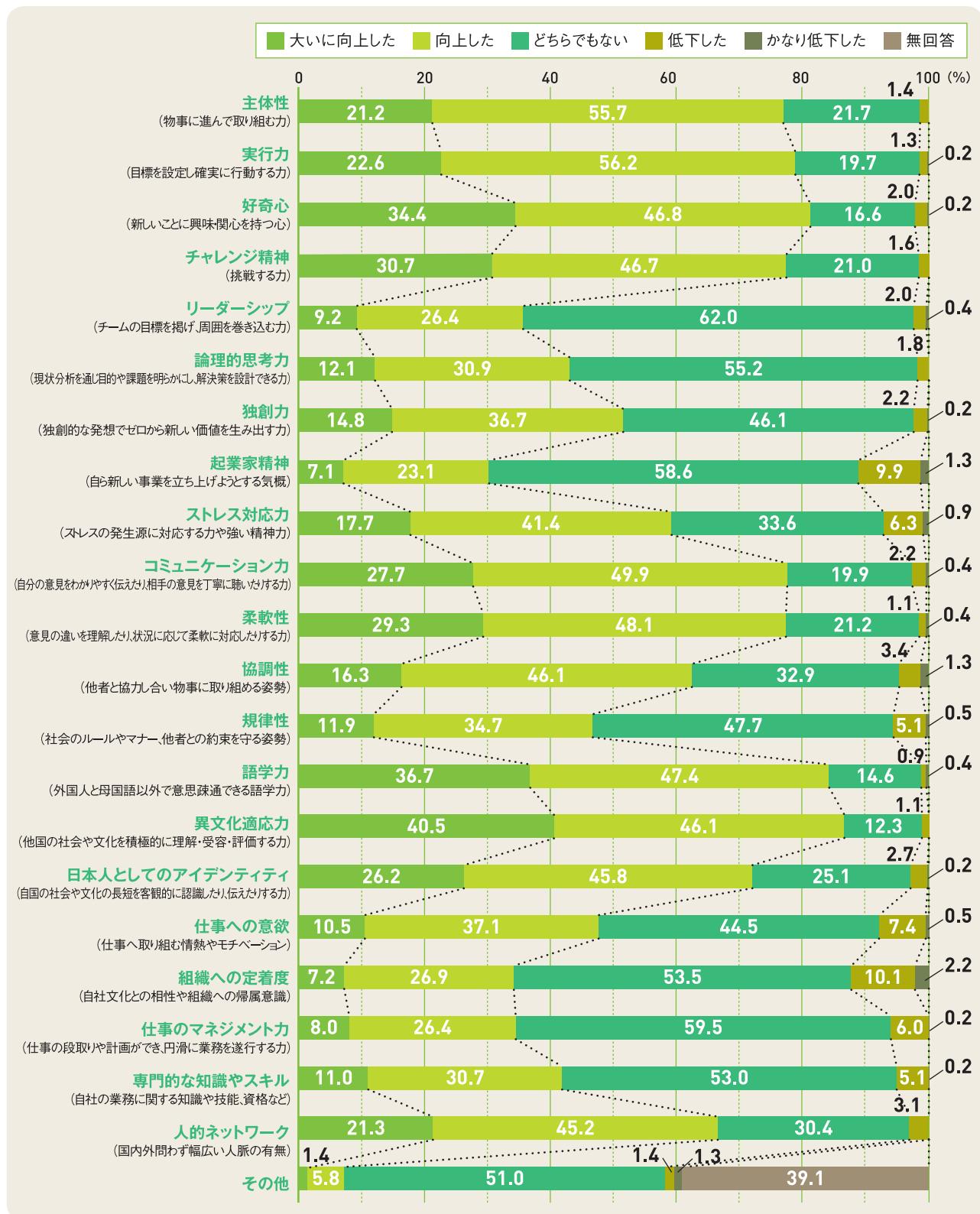
- ① 実行力（92.7%）
- ② コミュニケーション力（90.9%）
- ③ チャレンジ精神（89.6%）
- ④ 仕事への意欲（89.6%）
- ⑤ 主体性（89.3%）
- ⑥ 柔軟性（88.1%）
- ⑦ 好奇心（83.2%）

2. 海外就業体験者の視点

過去に海外就業体験を行った者553名へのアンケート調査の中で、「海外就業体験によりどのような能力・資質が向上したか」という設問に対し、「異文化適応力」「語学力」「好奇心」「チャレンジ精神」の項目において30%以上が「大いに向上した」と答え、「向上した」を加えれば、い

ずれも80%程度が変化を感じていることがわかった。

また、上記以外にも70%以上が「向上した」と回答した項目は、「主体性」「実行力」「コミュニケーション力」「柔軟性」「日本人としてのアイデンティティ」などであり、企業の視点と相違ないことがうかがい知れた。



3 海外事例

1.The Erasmus Impact Study

The Erasmus Impact Studyによると、海外経験が豊かな学生は、そうでない学生に比べ長期の失業に陥る割合が半分であり、さらに卒業後5年間における失業率も23%低いことが明らかにされた。当調査はエラスムス(ERASMUS: European Region Action Scheme for the Mobility of University Students)プログラムというEUの交換留学制度の評価と改善を図るために行われたものであるが、海外体験は若者のキャリア形成に寄与することが定量的に証明された報告書と言える。

渡航前後の性格テストによると、寛容性や自信、課題解決力、好奇心、自身の強み／弱みの自覚、決断力などといった汎用的な能力・資質が、非渡航者と比較して平均42%ほど向上していることがわかった。そして90%以上の学生が、他国に関わる知識や、他国籍の人々とのコミュニケーションや協業、適応性、語学力などが向上したと認識し、さらには99%の学生が自信

と適応力が大いに向上したと回答している。

一方、雇用主の92%が、海外体験で培われた本人の性格上の特性に期待をこめていることもわかっている。例えば、先ほど挙げた寛容性、自信などをはじめとしたソフトスキルと呼ばれる汎用的な能力・資質の優位性を認めているようである。

さらには雇用主の64%が採用時に海外経験を重要視するとし(2006年調査では37%)、国際的なバックグラウンドを持った卒業生には、業務上より大きな責任を与えると答えた雇用主も同じく64%に至る(2006年調査では51%)。

そして、エラスムス参加者のうち77%が卒業後10年以内にリーダーシップのポジションにつき、海外経験のない者に比べ管理職につく比率が44%高いという結果も出ている。

第3章

Global ACEの キャリア・ コンサルティング

1 概要



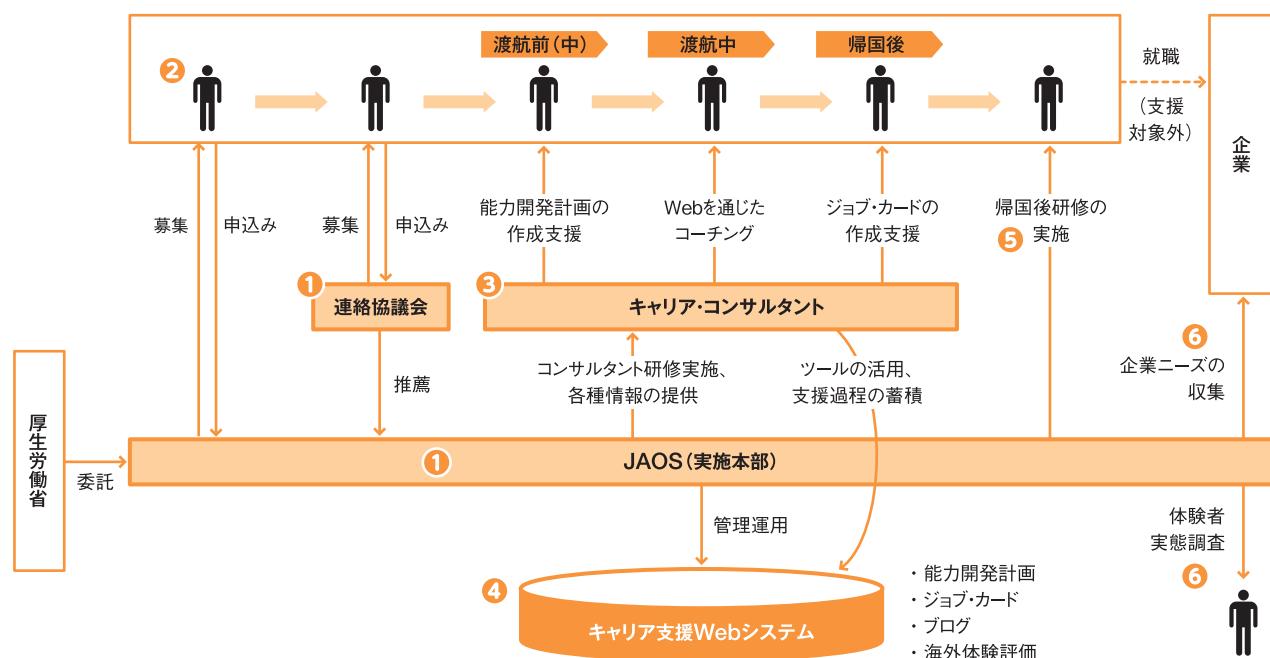
1. 事業スキーム

一般社団法人JAOS海外留学協議会が厚生労働省職業能力開発局海外協力課から『平成26年度 勤労青少年の国際交流を活用したキャリア形成支援事業』[通称「Global ACE (Global Action for Careers and Employability)」]を委託され、海外インターンシップやワーキング・ホリデー、語学研修、ボランティアなどの就労に関わる海外経験のある若年者に対して、その

経験を活かした就職を実現できるよう、キャリア・コンサルタントによる渡航前から帰国後までの一貫したキャリア・コンサルティングを実施した。

主な活動として、①体制構築、②告知・募集、③キャリア・コンサルティング、④キャリア支援Webシステムの運用、⑤帰国後研修の実施、⑥調査研究などを行った。

●事業スキーム



実施体制としては、JAOSが実施本部として当事業の運営を担うとともに、連絡協議会を形成し事業の推進を図った。

(1) JAOS

留学事業会社が属する業界団体。留学に関する諸問題の解決を図ると共に、安心できる留学環境実現のため、会員相互や国内外の教育機関、関係省庁、在外公館などとの連携を密にし、留学に関わるあらゆる者に対して、十分な情報提供や、留学教育・指導に必要な各種技能の研修・研究、留学トラブルなどの相談助言に関する事業を行い、消費者の保護と国際社会に貢献できる人材の育成に寄与することを目的とする。

(2) 連絡協議会

主に募集や各種調査などにおける当事業の推進に協力する国内外の留学事業会社や語学学校、旅行事業者など海外渡航支援機関の集まり。JAOS会員含め47機関から構成された。



2.キャリア・コンサルティング

(1) キャリア・コンサルタントの募集

厚生労働省管轄のジョブ・カード講習を修了し、かつキャリア・コンサルティングの経験を重ねてきた、海外体験にも通じたコンサルタント24名を組織化した。

(2) キャリア・コンサルティング実施

①キャリア・コンサルティングの概要

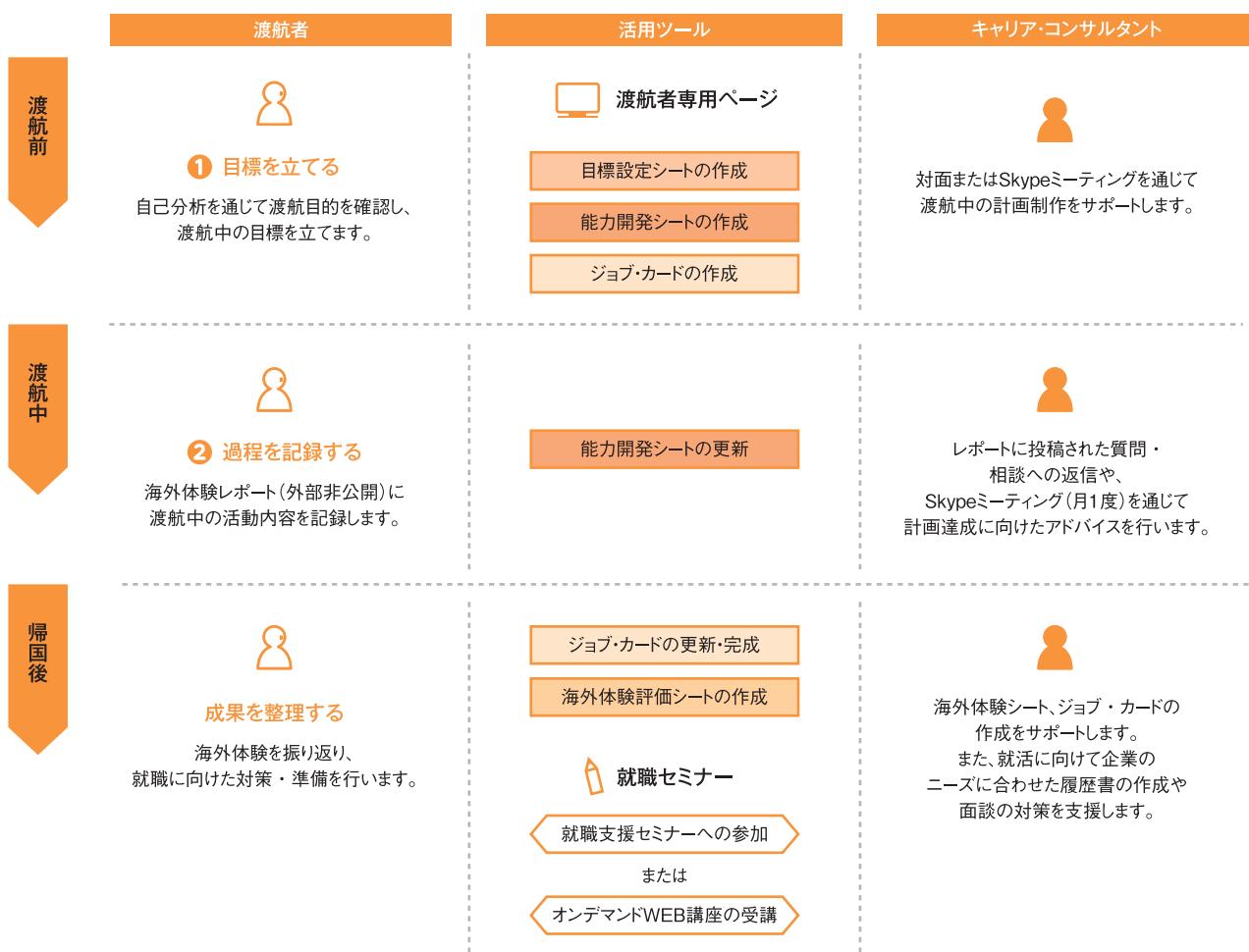
渡航前～帰国後まで同一のコンサルタントが以下のようなサポートを実施した。

- a. 渡航前：ジョブ・カードをもとに能力開発計画の作成
- b. 渡航中：Webを介して渡航者からの活動報告や質問などへ返答（随時）

月に1度のSkypeによる月次コーチングを通じて、能力開発に関する助言や質疑応答などを実施

- c. 帰国後：海外体験評価シートに渡航の成果を整理し、ジョブ・カードの完成を支援

●キャリア・コンサルティングの流れ



②活用ツールの概要

a. ジョブ・カード

履歴シート(学習歴、資格など)、職務経歴シート、キャリアシート(就業に関する目標・希望)の3種からなる厚労省推奨の履歴書フォーマット。

まず渡航前に渡航者自身が記載し、帰国後にキャリア・コンサルタントと一緒に海外体験評価シートをもとに渡航中を振り返りながら完成させる。

b. 目標設定シート

自分の強み・弱みや、将来のありたい姿、渡航で得たい成果、渡航中のありたい姿などの項目からなり、渡航前にキャリア・コンサルタントと一緒に作成する。

c. 能力開発シート

企業の求めるコンピテンシー(能力・資質など)を自己診断し、向上を図りたい能力について育成計画を立て、渡航中に進捗チェックや計画の見直しなどを行う。

d. Webシステム

渡航者の個人ページにあるブログ形式のコミュニケーションボード上で、担当コンサルタントへの質問・相談や活動ログ、能力開発の進捗などを書き込み、コンサルタントとの意思疎通を通じて、モチベーションの維持や不安解消を図る。

e. 海外体験評価シート

帰国後にキャリア・コンサルタントと一緒にコンピテンシーの向上度合いを確認し、どのような活動や意識がその成果につながったのかを整理する。

2 Global ACEで定義する海外就業体験 ・コンピテンシー

Global ACEでは、社会人基礎力や産業界が求める人材像、海外就業体験で習得できる能力を踏まえ（補足資料1を参照）、企業が求める能力・資質に見合ったコンピテンシー（海外就業体験版）を定義している。

(1) 語学力

- ① 外国語で日常会話ができる
- ② 外国語の新聞、広告、パンフレット、カタログなどから必要な情報を見付けることができる
- ③ 外国語で感謝や謝罪の気持ちを表した手紙を書くことができる

海外生活の成果としては最もわかりやすい能力と言えよう。TOEICなどで英語コミュニケーション能力を客観化することが望まれる。高評価であれば、グローバル志向の企業の就職活動にも優位に働かせることができる。

(2) 異文化適応力

- ① 異文化に興味を持ち、溶け込むことができる
- ② 自分とは異なる意見を持つ人を柔軟に受け入れることができる
- ③ 異なる文化の習慣、思考方法の違いなどを認め合うことができる

企業で重視され始めているダイバーシティー（多様性）と最も関連がある項目である。文化の違いを受け入れ、認め、尊重し合うことができるかどうかはグローバル人材にとって必要不可欠な部分である。他国籍の人々と仕事を進める機会が増えてくるなかで、知識としての文化やルールの理解など、最低限度の知識を身に付けることが重要であろう。

(3) 論理的思考力

- ① 発言の筋道を立てて話をすることができる
- ② 相手の意見を要約して、自分の言葉で言い換えることができる
- ③ 事実やデータに基づいて物事を考え、表現することができる

コミュニケーションを図るうえでの世界標準のフレームワークとして位置付けている。相手にいかにわかりやすく伝えるかはグローバルコミュニケーションにおいての共通要素である。日本人特有の場や雰囲気を察する能力は異文化の人々には通用しないことを認識しなければならない。言葉と数字を駆使し、わかりやすく組立ててプレゼンテーションすることにより、相手の理解と共感が得られる。

(4) ストレス対応力

- ① ストレスを感じることがあっても、ポジティブに捉えて対応できる
- ② 自分の感情をコントロールできる
- ③ ストレスを感じることがあっても、誰かに助けてもらいながら努力して乗り越えることができる

異国の地に身を置くことで様々な軋轢や戸惑いが生じる。このような困難な状況を乗り越えることで、ストレス対応力を獲得することができる。ストレスの処し方で重要なことは、ポジティブに捉えることができるかどうかである。どんなに悲観的な状況に陥っても、良い意味で開き直ることができ、今の自分が一皮剥けるチャンスであると捉えることができるか否かがポイントとなる。

(5) 主体力

- ① 適切な質問によって、自分が知りたい情報や相手の意見を引き出すことができる
- ② アルバイトやボランティア、各種アクティビティなどに積極的に参加したり、他者との交流を図ることができる
- ③ 目的を明示し、周囲に働きかけ、積極的な行動を促すことができる

特に日本人に見受けられる、質問をしないことが美德のような考えは世界では通用しない。また、あらゆる機会に主体的に取り組むことで、限られた期間でも大きな糧となり、リーダーシップを養うことにもつながる。

(6) 提案力(創意工夫する力)

- ① 日々の業務の中から問題を発見し、新しい解決方法を提案することができる
- ② 業務の中での課題を、周囲を巻き込みながら解決することができる
- ③ 業務や事業に関する建設的な提案をすることができる

現状に決して満足することなく、いつでも創意工夫し、改善していこうという意識が大事である。これが「変革」につながっていく。目的意識・危機意識・当事者意識を持っているかどうかが鍵となる。これらの意識があれば、問題発見、問題解決、新しい価値創造へつながっていくであろう。提案を通すためには周りを巻き込んでいくリーダーシップ力(統率力)も兼ね備える必要がある。

(7) コミュニケーション力

- ① 自分の意見を的確に伝えることができる
- ② 相手の意見を丁寧に聞いて意思の疎通ができる
- ③ 場面に応じて適切に伝達手段(口頭・Eメール・SNS・電話)を活用することができる

コミュニケーション力とは「話す力」だけではなく「聞く力」も重要である。きちんと相手の話を聞くことができなければ、的確な問題解決ができない。その意味で、傾聴する力がベースとなる。今後はコミュニケーションツール(情報発信ツールおよび情報収集ツール)を上手に使いこなせるかどうかも必要となる。ITリテラシーの高さも間接的であるが要求されるだろう。

(8) 実行力(チャレンジする力)

- ① ものごとに粘り強く取り組むことができる
- ② 目的の達成に向かって、失敗を恐れずにチャレンジすることができる
- ③ 自ら目標を設定して、計画的にやり遂げることができる

計画だけで終わらず、勇気を持って走り出し、きちんと成果を出すまで遂行できるかどうかが重要である。臆して実行に移さなければ何も変わらない。海外体験を通じて新しいことに果敢に挑戦していくことで養われていくであろう。ますます多くの企業がグローバル展開していくなかで、未開の分野を切り開いていく人材は重宝されると思われる。

第4章

コンピテンシー 向上の秘訣

1 概要

就職活動に成功した支援者を対象に、コンピテンシー向上の成果とその要因について事例を紹介する。

2 コンピテンシー向上の成果と要因

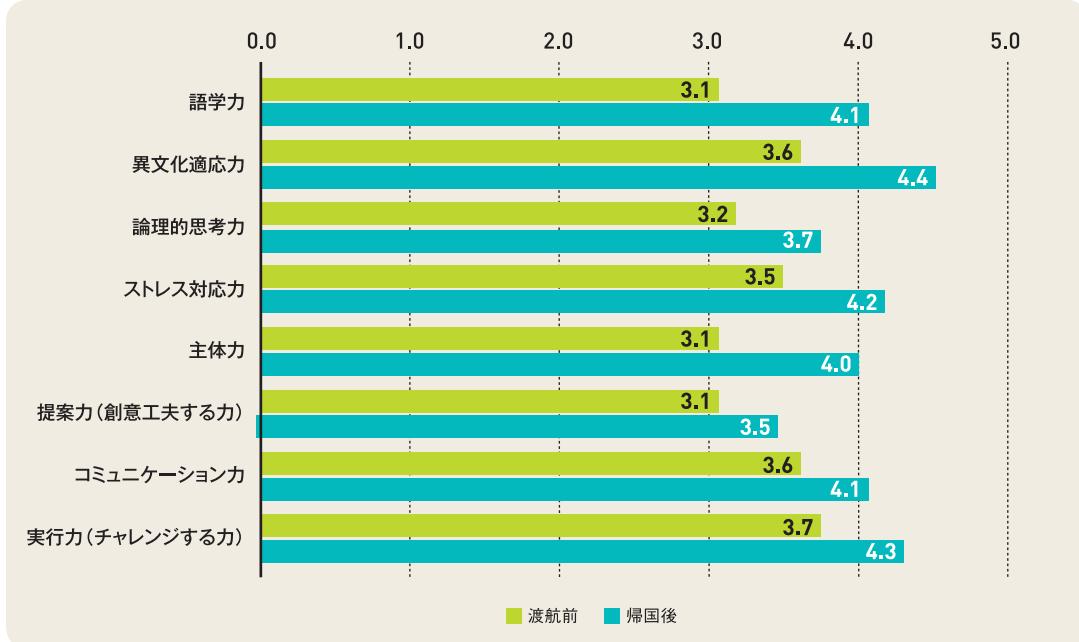
1. コンピテンシー向上の度合い

8つの能力について、そのレベルを渡航前と帰国後の各時点で5段階(1「ほとんどできない」、2「20~30%程度できる」、3「50%程度できる」、4「70~80%程度できる」、5「ほとんどできる」)で自己評価した結果をグラフで示す。

最も向上したのは、1.0ポイント増の語学力であった。

次に主体力(0.9ポイント増)、異文化適応力、ストレス対応力(共に0.7ポイント増)と続き、0.6ポイント増は、コミュニケーション力、実行力(チャレンジする力)であった。なお、全体平均でみると、渡航前(3.3)と帰国後(4.0)では0.7ポイントの向上であった。

●能力開発成果の自己評価





2.コンピテンシー別の成果と要因

各コンピテンシーが、どのような要因でどの程度向上したのかを一部紹介する。



(1) 語学力

	成果	要因
①外国語で日常会話ができる	ネイティブの話す非常に速いスピードの会話に当初は苦労したが、聞き返す、確認するなどしてなんとか意志疎通を図った。リスニングスキル、スピーキングスキル、語彙力が上がった。	英語環境に身を置くことを常に意識し、日本人以外の友人と一緒にいることを心掛けた。結果的に他国の友人から、発音や多様な表現を学ぶことができ、異文化理解にもつながった。日本人同士でも英語で話すよう心掛けた。
	自信を持って会話ができるようになった。わからない・聞き取れない時はきちんと聞き返すようになった。	間違いを恐れずに、できるだけ会話をするようにした。意識して海外の友人と出かけたり、イベントに積極的に参加して話す機会を作ったりした。
	医学的な話など、少し難しい日常会話もできるようになった。	ホストファミリーと暮らすなかで、日常的にも深い話をするようになった。
②外国語の新聞、広告、パンフレット、カタログなどから必要な情報を見付けることができる	海外のサイトを抵抗なく見られるようになり、検索範囲が広がり、英語で書かれた情報も収集できるようになった。	毎日、新聞を読むことを心掛けたり、海外のサイトを見たりしていた。
	現地のサイト、新聞を利用して、住居や仕事先を探すことができた。	現地での職探しにおいて、あらゆる情報(現地のニュース、事件、天気予報など)を地元メディアを用いて、日常的に英語で収集していた。新聞配達のアルバイトをしていたので新聞を手にすることができる環境だった。
③外国語で感謝や謝罪の気持ちを表した手紙を書くことができる	単純にThank youやI'm sorryだけでなく、理由や自分の感情なども添えられるようになった。日本語よりも英語の方が伝えやすい思いもあると思った。	誕生日や引越しの時に手紙を書いたり、Facebookやメールなどを通して英語でのやりとりをしたりする機会が日常的にあった。また、インターネットでネイティブが使う言い回しなども調べて積極的に使うようにしていた。
	ホストファミリーの誕生日にバースデーカードを送ったり、毎日、エッセイなどの文章を書いたりして、カジュアルなものからフォーマルな文まで書けるようになった。	書くことの重要性を認識し、意図的にライティングに力を入れるようにした。



(2) 異文化適応力

	成果	要因
①異文化に興味を持ち、溶け込むことができる	その国の文化、宗教、環境などを学んだことによって、日本で生活していた時の固定概念を捨て、グローバルなレベルでのものの考え方ができるようになった。	国際都市に滞在していたので、異文化に溶け込みやすかった。
	異文化を知るなかで、自分は日本人らしい人間であることに気付かされた。時にその場の雰囲気に溶け込めないこともあったが、日本にはない習慣や文化を日常生活に取り入れることができた。	様々なことに興味を持つ性分である。当たり前だと思っていた価値観が当たり前ではないことを学んだ。
	ホストファミリー・アルバイト・ルームシェア・学校など、日本人のいない環境で生活し、様々な国の文化に触れることができた。	なるべく日本人、日本語から離れるような環境作りに努め、出会いにも恵まれた。
②自分とは異なる意見を持つ人を柔軟に受け入れることができる	以前よりも人の意見を受け入れる受け皿が大きくなったと思う。異なる意見に触れる機会があった際は、「そのような意見もあるのだな」と思うようにしていた。自分とは異なる意見を持つ人に興味を持って話を聞くことができるようにになった。	英語では自分の言いたいことが上手く伝えられなかったため、相手の意見を聞く機会が多くた。また、海外ではしっかりと自分の意見を持っている人が多く、彼らの意見に興味を持つことができた。
	自分の考え方が全てではないということを再認識し、より幅広く様々な人の意見を受け入れ、たとえ違った意見を持っていたとしても、それもひとつの考え方なのだと自分のなかで整理し、消化できるようになった。	シェアハウスでの他国の人との共同生活や、現地家族との暮らしのなかでだんだん身に付いた。相手の考えを柔軟に受け入れようと思つた。
	文化や価値観の違う人達と接する際に、自分と違う人の意見や考え方などを否定することなく、受け入れることができるようになった。	人はそれぞれ考えが違うと思い、相手を知ろうとする好奇心を持っていた。
③異なる文化の習慣、思考方法の違いなどを認め合うことができる	以前は日本人らしい凝り固まった意見を持っていたが、海外では正反対の考え方を持っている人も多く、気付けばそれらの意見も好きになっていた。	様々な国の人と出会い、考え方は人それぞれで、互いの意見を交わすことの面白さを実感できた。
	違う考え方や価値観を持っている人と本当に理解し合うのは不可能に近いくらい難しいということを知り、理解し合うというよりも、違いを認識してお互いの存在を認め合うことがゴールだと考えが変わった。	当たり前だと思っていた価値観が当たり前ではないことを、友人との会話から学んだ。異なる考え方の人達に、溶け込むことはできるが、深いレベルで共感することは難しいと思った。
	生活様式、生活習慣、食生活すぐに慣れ、ストレスをあまり感じることなく生活することができます。	快適に過ごすために、異なる文化の習慣や思考方法の違いを認め、学ぼうと心掛けた。



(3) 論理的思考力

	成 果	要 因
①発言の筋道を立てて話すことができる	結果や結論、話のポイントから話せるようになった。	先生の指導で、英語で話す時は結論を先に言ったり、伝わりやすいようにシンプルな言葉で簡潔に話したりすることを常に心掛けていた。
	自分の考えを組み立て、きちんと伝えることができるようになった。	自分の考えを伝える必要性に迫られ、自ら本を読んだり、データを調べたり、裏付けを持って話し、伝える習慣が身に付いた。
	意見を言う際にその根拠、理由もつけて発言するようになった。	学校で意見とその理由を聞かれる機会が多くた。
②相手の意見を要約して、自分の言葉で言い替えることができる	相手が何を伝えたいのかを、言葉だけでなく表情などから察し、相手の立場を考えて言葉を選ぶことができるようになった。	円滑にコミュニケーションを取るために必要性を感じ、英英辞書をできるだけ使い、同じ意味の単語を覚えるように意識し、ボキャブラリーを増やす努力をした。
	聞き間違いを防ぐ意味でも、常に相手の話を聞いた後は自分の言葉で「～という私の理解で正しいですか」と確認するようになった。	非ネイティブスピーカー同士で話している場合、お互いの理解の確認に時間がかかり、話が少しずつしか進まないこともあるなかで、コミュニケーションの齟齬がないよう心掛けた。
③事実やデータに基づいてものごとを考え、表現することができる	新聞配達のアルバイトで配達ルートの効率化を実現した。	業務内容を把握し、仕事の効率化を考えて業務の時間短縮を提案することができた。
	日本を紹介する時に人口や面積などの客観的数据を使って説明した。株価や経済の話をする際は数字を使って根拠を示し、自分の意見を表現した。	友人の国の印象や日本のマスメディアから知ったことを友人に伝えた際、事実と少し違うと指摘されたため、データを用いて説明する必要に迫られた。
	自分の興味のある分野や勉強した分野であれば表現することができる。語彙力とリスニング力を伸ばすことは今後の課題と感じている。	ホストファミリー、友人とのコミュニケーションは必ず英語を使おうと心掛けた。



(4) ストレス対応力

	成果	要因
①ストレスを感じることがあっても、ポジティブに捉えて対応できる	この状況から何か学ぶものがあるはず、落ち込まずに前向きに打開策を探していくと、ストレスフルな状況をポジティブに捉えるようになった。	現地で想像を超える色々な人生を歩んできた人と出会い、そのような友人達が困難にめげず前向きに生きていく姿に驚き、励まされ、また勇気をもらった。私もその友人達のようになりたいと思った。
	異文化にストレスを感じることが多かったが、「海外で生活しているのだから仕方がない」と気持ちを切り替えることができた。	ホストファミリー、友人、先生など、周りの影響。辛い時には渡航の目的を再確認した。
	前向きな性格の方々に影響され、ネガティブな気持ちを持ったまま生活するということはなかった。	現地の方は失敗を気にせずに、心にゆとりのある人が多かった。
②自分の感情をコントロールできる	感情的になっては冷静な判断ができないと思い、感情や行動をコントロールできるようになった。	英語ではなかなか自分の感情を伝えることが難しく、我慢することも多かったが、様々な経験を通して、自分のことをよく知ることができた。
	不安な時も自分の殻にこもるのではなく、人に相談したり、つらいということを冷静に表現しようと努力するようになった。	感情を抑える=感情のコントロールだと思っていたが、お互いをより深く理解するためには、感情を表すことが必要な時もあると考えるようになった。以前は自分の感情を抑えるように努めていたが、それは最善ではないと考えるようになった。
	以前は感情を抑えていたが、ストレスを感じながらも自然な対応が取れるようになった。	自分の殻に閉じこもらず、自分の考えを的確に表現できるようになった。
③ストレスを感じることがあっても、誰かに助けてもらいながら努力して乗り越えることができる	人の助けが欲しい時、相談に乗って欲しい時は、自分から積極的に周りの人に助けを求めるようになった。	誰も知り合いのいない土地に行き、黙っていては誰も助けてくれない、自分から動かなくては何も変わらないということを、身をもって感じた。それと同時に、助けを求めれば人は協力してくれるものだということを知った。とても親身になってくれる友人に出会い、以前より人を信頼するようになった。
	1人でできる仕事、勉強には限界があると理解し、協力を仰ぎ、結果を出そうと思えるようになった。	周りの人の支えがあった。日本語を話したい時や、自分の気持ちをストレートに表現したい時は、日本人の友達とゆっくり話をする時間を作ったり、日本にいる友人や家族に話をした。自分自身の英語力が本当に伸びているのか不安に思う時には、友人やカウンセラーに相談して、モチベーションを維持するよう心掛けた。
	困った時には友達に相談して、仕事が見付からなかつた時も紹介してもらった。	なんでも話せる友人ができた。不安なこと、自分の悩みを包み隠さず打ち明けることができ、いつも心から励ましてくれた。



(5) 主体力

	成 果	要 因
①適切な質問によって、自分が知りたい情報や相手の意見を引き出すことができる	<p>以前は英語で質問することができなかつたが、躊躇せずに質問するようになった。</p> <p>質問をすることはコミュニケーションの一部であって、質問内容まで気にしそぎなくていいと考えるようになった。</p>	相手との会話を広げるためにも質問を盛り込むことを意識して会話した。質問せずに知ったふりをしている方が後で困る、自分の成長につながらないということを感じた。
②アルバイトやボランティア、各種アクティビティなどに積極的に参加したり、他者との交流を図ったりすることができる	<p>日本語教師、ボランティア、インターンシップ、イベント企画、住み込みなど様々なことにチャレンジした。</p> <p>毎日のように外に出て、他者との交流を図った。</p> <p>新しい人と知り合うことへの緊張感を以前ほど持たなくなつた。積極的に行動した結果、日本にいた時よりも幅広い人と接することができ、友人関係でも自分から誘うようになった。</p>	<p>学校で気になったことをどんどん質問する生徒たちを目のあたりにした。先生や友人達との会話の中で、質問をすることは良いことだという価値観を多くの人が持っていることを感じ、「自分の質問内容がもし変だったらどうしよう」という恐怖感を感じなくなった。</p> <p>チャンスがあればなんでもチャレンジするという精神で過ごした。</p> <p>限られた期間で、毎日を無駄にしたくなかった。</p> <p>様々な人と接する楽しさを知った。回を重ねるごとに、新しい場所へ飛び込む恐怖心が減っていった。</p>
③目的を明示し、周囲に働きかけ、積極的な行動を促すことができる	<p>自分の目標を達成するためには周囲の協力と自己の積極性が不可欠だとわかり、実行できるようになった。</p> <p>以前は「目的が果たせない可能性があるし、やめておこう」と考えるだけだったが、今は「もしかして無理かもしれないけど、まずは提案してみよう」と考えるようになった。アルバイトでも、自分の考え、目的などを周りに伝え、協力してもらうようにお願いできるようになった。</p>	<p>海外では主張し周囲を巻き込んでいく積極性が必要だとわかった。</p> <p>小さな出来事の蓄積で、自分から発信することへの恐怖心がなくなったから。</p>

 (6) 提案力(創意工夫する力) <

	成果	要因
①日々の業務の中から問題を発見し、新しい解決方法を提案することができる	アルバイト先で、古い値付けリストの更新を提案した。	自分の意見を積極的に表現するようになった。お店をより良くしたいと思うようになった。
	新聞配達の配達ルートの改善に貢献した。	業務を理解し、解決方法や正しいと思ったことを上司に伝えられる論理的思考が身に付いた。
②業務の中での課題を、周囲を巻き込みながら解決することができる	閉じこもらず周りを巻き込むことが、仕事の円滑化につながった。	友人と通勤途中にどのように工夫すれば良いか、話し合った。
③業務や仕事に関する建設的な提案をすることができる	自分のミスと向き合い、分析し、同じミスを繰り返さないように今後どうすれば防げるかを考えるようになった。	自分がミスをした時も、なぜ起つたか、どうすれば再発を防げるかまでを考えて報告するようにした。

（7）コミュニケーション力

	成果	要因
①自分の意見を的確に伝えることができる	日常生活において、自分の言いたいこと、伝えたいことは相手に理解しやすい表現を考え、発信できるようになった。また自分の言いたいことが正しく伝わらなかった場合でも、訂正して言い直すことができるようになった。	英語ではとにかくシンプルに伝えることが大事なので、なるべく簡単に簡潔に、誤解を与えないよう心掛けて話すようにした。常に自分の意見が求められるシーンが多かった。
	友達と深い話ができるようになった。 お客様に軽いジョークを言えるようになった。	普段の生活のなかで人々がどのように会話しているかを常に意識して耳を傾けていた。
	急いでいる時は用件だけ簡潔に、時間のある時は具体例や詳細も添えてなど、状況に応じて伝えることができるようになった。	英語でコミュニケーションをするなかで、どのように話せばよりわかりやすいかを以前より意識して話すようになった。
②相手の意見を丁寧に聞いて意思の疎通ができる	相手の話したことを自分の言葉で説明し、相手の話をきちんと理解できているかを確認することで、意志の疎通ができるようになった。	英語の聞き取り間違いがないかを確認するためにしていたが、コミュニケーションにとても役立つことだとわかったので、常に行なうようになった。
	表情、身振りなどを全て駆使して人の話を聞くことができるようになった。	語学力が不足していたため、自然と身体全体で対話するようになった。
	違う考えを持った友達や仲間と理解し合うために討論できるようになった。	しっかり話を聞いて、わからないことは恥ずかしがらずに「わからない・聞き取れない」と言って理解できるまで説明をしてもらった。また、相手を知ろうとする好奇心を大切にした。
③場面に応じて適切に伝達手段(口頭・Eメール・SNS・電話)を活用することができる	急いでいる時や直接話したい重要なことは電話で、急いでいない時はEメールでなど、目的に応じて伝達手段を使い分けられるようになった。電話に対する抵抗がなくなった。	知り合って間もない友人から受電することが何件か続いた時、電話することへの抵抗感が薄らいだ。電話を使うようになったなかで、直接話すことの利点に気付いた。
	ホストファミリーや友人と、様々な伝達手段で問題なくコミュニケーションを取ることが可能となった。ボディランゲージも大切だと感じた。	コミュニケーションを円滑に進めるために、必死に活用した。
	SNSへの書き込みやメールを使った求人への応募、旅行に関する問い合わせ・予約ができるようになった。	SNSへ英語で投稿したり、友人と積極的に出かけたりすることを心掛けた。

(8) 実行力(チャレンジする力) <

	成果	要因
①ものごとに粘り強く取り組むことができる	相手が自分の意見を理解していない場合、違う表現で伝えてみたり、ジェスチャーや具体例を挙げたりして理解してもらえるように取り組んだ。また、手続きや資格を取得するにあたっては、正確な情報を得なければならなかつたため、辞書などを用いて、粘り強く取り組んだ。	英語で書かれた資料・データを正確に理解するためには、必然的に粘り強く取り組まなければいけなかった。また、英語で相手に自分の主張を理解してもらうためには、粘り強く訴えなければいけない場面もあった。
	過酷な環境下、退職者が多い職場での仕事をやり通した。その後、résuméを配り続け、希望の仕事を獲得した。	仲間に恵まれたことと、目標を達成したいという強い気持ちがあった。
	インターンシップ中、厳しい上司からの指導も多く、落ち込んだこともあったが、最後まで努力を継続できた。また、目標だった試験に合格できた。	自分で決めたことは最後まで頑張り、やるからには責任を持って最後までやることが大切だと考えている。また、少しずつ成長していく自分が感じられ、モチベーションをキープすることができた。
②目的の達成に向かって、失敗を恐れずにチャレンジすることができる	自分がやりたいこと、決めたことはまずやってみて、それで失敗してしまったら、もう一度チャレンジすればいいと思えるようになった。	やらなければ何も起こらないことがわかった。チャレンジせずに後悔したくなかった。
	フルマラソンに参加し、完走できた。失敗を恐れてチャレンジしないことの方が悪いと思えるようになった。	日本ではできないことを積極的にチャレンジしようと決めて渡航していた。
	目標の資格に合格できた。未経験の仕事に挑戦した。	新しい能力開発に挑戦し、習得したいという気持ちが強かった。
③自ら目標を設定して、計画的にやり遂げることができる	英語をビジネスレベルまで引き上げるという目標達成のために、最初3ヶ月間はESLクラスで基礎固め、その後1ヶ月はスピーキングクラスで会話力、またイントネーション、発音の強化、そして最終的にはビジネスクラスに入学することができた。ビジネスクラスの入学テストは、当初、実力が入学条件に満たなかつたが、コツコツと毎日努力した甲斐があり、1ヶ月後に入学できた。	復習ノートを作成し、学んだことや新しい語彙をまとめて覚えるよう努力した。携帯アプリの単語帳、またボイスレコーダーを使用し、いつでもどこでも単語を覚えられるように心がけた。
	仕事でノルマを達成できた。渡航目的であつた海外で就労するという目標を達成できた。	時間には限りがあることを意識し、あらかじめ、きちんと行動計画を立てていた。
	目標達成のために何が必要で何をするべきなのかを考えながら生活し、定期的に進捗を確認することができた。	後悔が残らないように現地生活を送りたいと思い、思ったことは即実行を心掛けた。

第 5 章

成長の プロセス

1 概要

就職活動に成功した支援者を想定し、キャリア・コンサルタント（以下CC）が渡航前～帰国後の各フェーズにおいてどのように関与し、支援対象者がどのように取り組んだかについて考察する。

2 プロセスマップ

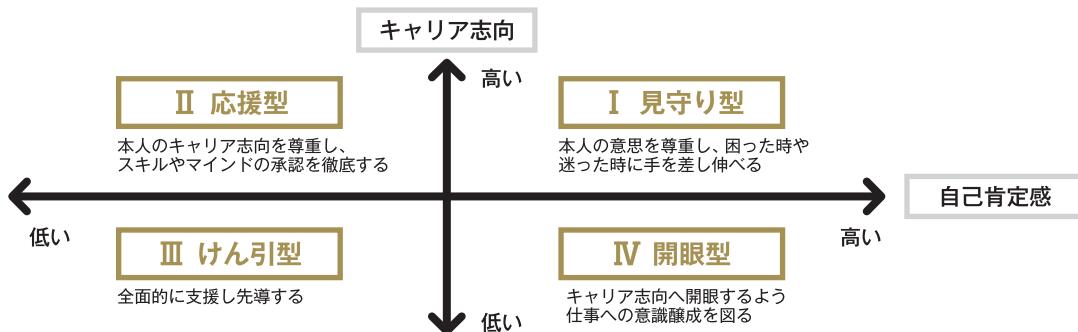
1. プロセスマップ概要

おおむね各フェーズで以下のようなプロセスに基づいて、キャリア・コンサルティングが行われている。次ページ以降は以下のプロセスに則り分析を進めていく。



2.CCの関与スタンス

H25年度事例分析では、以下のように支援対象者のタイプ別にCCの関与スタンスを分類したが、分析の便宜上、プロセスによってはⅠとⅢを分けて記載することとする。



3 渡航前



ラポールの構築

渡航者とCCとの間の信頼関係構築は、以降の支援を有効にするために必要となる。一度構築されたとしても、何かのきっかけで崩れることがあるので慎重な交流が肝要である。常に受容と共感、愛情を持って対話することが大事である。

コーチングのポイント

- 渡航者が人物像を見極める。最低でも2つのタイプ(見守り型・けん引型)のどちらであるかを把握し、それに適した対応をする。その時々での見直しも必要なことがある。
- CCから自己開示し安心感を与える。冗長にならず手短かに行うことが肝要である。
- これからサポート内容の説明をすると同時に、期待している支援もヒアリングする。
- 受容と共感、愛情を持って話を聞く。この姿勢は以降も継続する。
- 「一緒に歩く」と伝えることで、相手が安心する。

支援対象者の姿勢・取り組み例

- コーチング予定日の前に、日程や場所の確認メールをくれた。
- ポジティブな性格で物事の捉え方が偏っていない。
- キャリアに対する意識が高く、意欲的に取り組む姿勢が見えた。
- 受け身の姿勢ではなく、積極的に質問をしていた。
- 社交的で礼儀正しく、明るい印象だった。
- 真面目で几帳面な人柄が感じられた。
- アドバイスを受ける心構えがきちんとできているため、説明すべきことがスムーズに行われた。
- 最初からCCを信頼してくれて、積極的に自己開示し、自分のことを知ってもらおう、わかつてもらおうと感情を吐露してくれた。

CCの対応例

- 渡航の目的や背景などをじっくりヒアリングすることで信頼関係を構築した。
- 事前記入シートをしっかり読み、バックグラウンドを理解し、また知らない資格などを持っていたら事前に調べて渡航者から信頼を得るようにした。
- 倾聴をもとに渡航前の不安な気持ちを受け止め、和らげるよう努めた。
- 渡航者を理解するために事前に全ての情報に目を通し、渡航する目的によっては現地で必要な情報を準備しておいた。
- コーチングの目的とそれぞれの役割を説明した。
- 他の渡航者の体験談やCC自身の経験を盛り込みながら、渡航中の就業や学校など生活に必要な情報を提供した。

自己肯定感の強化

渡航者の自己肯定感が低いと現地での行動を抑制するので、自己肯定感を高めることが必要になる。自己肯定感が低くなくても、強化することは行動に拍車をかけるうえで大変有効である。

コーチングのポイント

見守り型	けん引型
・心配なことがないか尋ねる。	・渡航を現実逃避と捉え、自己肯定感を低くしている場合、渡航を決めたこと自体が実行力の証であると肯定する。
・渡航を決めた経緯を尋ねる。	・人生を振り返る時間を作り、受容と共感を持って聞く。
	・これまでに頑張ってきたことや成功体験(小さいことでも)を承認する。

支援対象者の姿勢・取り組み例

- 渡航前にある程度の英語力を身に付けていた。
- コンピテンシーの自己評価が高い項目が多く、自己肯定感が高かった(慢心ではなく)。
- 海外に住むという夢を実現させるためにコツコツと貯金を積み重ね、努力してきた経緯があった。

CCの対応例

- 人生をじっくり振り返る機会がなかったために自己肯定感が低い場合、コーチング時にじっくり話してもらうことで、渡航を人生のターニングポイントと前向きに思えるようになった。
- しっかり目的を持っていないことに焦りを感じている渡航者が多いので、まずはこれまでの経験をしっかり聞き、頑張ったことなどを承認し、自己肯定感を上げた。その後「企業が海外体験者に期待する力」を説明し、帰国後に納得のいく進路選択ができるように、その力を育みながら一緒に頑張りたい旨を伝えることで信頼関係の構築につながった。

過去のキャリアの棚卸し

過去を振り返ることで、改めて、または新しく自分自身の強みに気付く。また、その作業をすることで気持ちをリセットし、新たな気持ちで渡航に臨めるようになる。

コーチングのポイント

見守り型	けん引型
・記入済の各種シートをもとに、前職の話を聞き、身に付いている能力を明確にする。また、その能力が身に付いた背景を尋ねる。	・前職を辞めた経緯を聞くことで、気持ちが整理できて浄化されることもある。また、渡航目的が明確になることもある。
・自分の強みを言語化。	・過去のキャリアがない、または自信がない人にはこれからの自分を想像してもらう。

支援対象者の姿勢・取組み例

- 退職・海外渡航・再就職への活動など、全てに本人の意思・意欲が感じられた。
- 事前記入シートをしっかりと記入し、コーチングに臨んでいた。
- 経歴・職歴の自己開示がしっかりできていた。

CCの対応例

- 事前記入シートを踏まえて、コンピテンシーの状況を把握した。

能力開発計画の作成 <

相談をしながら目標を達成するために具体的な行動計画を作る。現地生活をイメージできるような情報提供も必要である。

コーチングのポイント

見守り型	けん引型
・キャリアビジョン(人生・仕事において自分自身のなりたい姿)を明確化。	・同左
・強化項目を2、3決める。	・同左
・コンピテンシーの自己評価を促す。	・確認しながらコンピテンシーの評価を一緒に行う。

支援対象者の姿勢・取り組み例

- 将来のキャリアビジョンの方向性をしっかり説明できた。
- 将来を見据え、スキル向上へのモチベーションも高く、冷静・客観的に状況把握・対応する姿勢が感じられた。

CCの対応例

- 能力開発シートの項目を使って、渡航前の自己理解を促した。
- 渡航者が希望する業種に必要なスキルを伝え、そのための取り組み方を一緒に考えることに注力した。

目標の設定 <

渡航の大目的を踏まえ目標を設定する。いくつか設定することで渡航中の倦怠や成長の停滞を防ぐことにもつながる。

コーチングのポイント

見守り型	けん引型
・目標設定の意義とスカイプコーチングの重要性を説明する。	・同左
・語学力の他にも2、3の目標を定める。	・長期目標は短期目標にブレイクダウンする。
・希望する職種に必要なスキルを2、3考え方目標設定する。	・「企業が渡航者に期待する力」を説明し、目標設定の必要性を説く。

支援対象者の姿勢・取り組み例

- 渡航前に目標設定の重要性をしっかりと理解でき、意識を変えることができていた。
- 渡航目標の達成に向けて、渡航先の環境も含め積極的な情報収集を行っていた。

CCの対応例

- 「専門性」「強み」「自信」を向上させることを目標とし、そのための支援をすることを約束した。
- やりたいことが多くある場合、手を広げ過ぎて収集がつかない可能性があるので、できることから始め、ひとつひとつ積み重ねていくように助言した。

渡航目的の明確化

採用面接で聞かれることも多いので、渡航目的は明確にする必要がある。目的をはっきりと言葉にできない渡航者もいるので、相手のペースに合わせて一緒に考える。目的が明確にならなくても、その後の交流時にCCが目的につながるきっかけを捉え、明確にすることもある。

コーチングのポイント

見守り型	けん引型
・渡航目的を聞き、フィードバックし、それでいいかを確認。	・目的が不明確な場合、渡航を決めた時、または会社を辞めた時の話を詳しく聞く。
・渡航目的を言語化する。	・渡航の目的(海外で何をしたいか)と一緒に考える。その時、自分中心に考えるように促す。
・本人のポテンシャルや意欲によっては目的レベルを上げるような引き出しありも有効。	・目的が明確でないことで自信をなくしている場合は、明確になるまでの目的として(達成感を感じやすい)語学力を提示。
	・ネガティブな動機(例:人間関係の問題など)で渡航を決意した場合、そのきっかけを明確にできるのであれば明確にして承認する。そのうえで今回の渡航の目的をポジティブなものに転化する。
	・目的が不明確な場合、帰国時に持ち帰りたいものを3つ挙げてもらい、渡航目的に結び付ける。

支援対象者の姿勢・取り組み例

- 目的意識を持ってコーチングに臨んでいた。
- 渡航の目的がはっきりしていた。
- 高い英語力を身に付けるという具体的な目的を掲げ、希望に満ちている様子だった。

CCの対応例

- 海外渡航という貴重な体験を最大限に活かすための意識喚起を心掛けた。
- 渡航目的の明確化と、これからどう生きたいのかを問いかけた。
- 渡航を決意した経緯をしっかり聞き、何を持ち帰りたいかを話し合った。

4 滞在中



渡航直後の不安の解消

現地での生活に慣れるまではメンタル面も支えつつ、自立を促すように見守る。

コーチングのポイント

見守り型	けん引型
・海外（文化や言葉が違う）で生活するだけで大変なことだと共感する。	・同左
・海外へ行くということはトラブルを経験しに行くことでもあると伝える。	・同左
	・不安に寄り添う。他の渡航者も同様であることを伝える。
	・これから自分の将来を考えていけばよいと承認する。

※常に自己肯定感の強化に気を配る。

支援対象者の姿勢・取り組み例

- 定期的に進捗状況を報告してくれた。
- 必ずブログに対する返信があり、活動報告も自分からしていた。
- コーチング予定を変更する場合、早めに丁寧な断り文で連絡を入れてくれた。
- 学校や仕事のみならず、普段の生活について積極的に話してくれた。

CCの対応例

- 目標を振り返ることで、渡航者の思いや目標を理解したコーチとして全力でサポートすることを毎回伝えた。
- CC自身の海外経験を事例にアドバイスを与えた。
- 心配事や悩んでいることを話題にすることで良好な関係が構築でき、渡航者はより意欲的に就業や学習に取り組めた。

行動の後押し <

現地生活に慣れたら、早い段階で就業を勧める。まずは行動を起こすことで、様々な能力が身に付くという実体験を少しづつ積み重ねることが大事である。

コーチングのポイント

見守り型	けん引型
・苦労話をたくさん作ることを勧める。それによる自己成長を語ることは就職活動時の強みとなる。	・同左
・就労を勧め、自分で動ける場合は任せる。	・自己肯定感が強化されたのを確認したうえで、就労の意義を伝え、行動を勧める。
・与えられた仕事+aの行動を勧める。海外だからで起きる積極的なアプローチと一緒に考える。	・現地での仕事の探し方がわからない場合、具体的な探し方を提示。飛び込みで直談判も可能。他の渡航者の事例も紹介する。
・行動できない場合、目標を再確認することで鼓舞され、行動につながることがある。	・行動できない場合、根本原因を探るため過去と向き合う(例:過去に思い切って行動したことを見くなど)。
	・今までと違うこと、初めてのこと、避けていたことに踏み出す後押し。
	・やりたいことが見付からない、わからないという場合、行動するとわかることがあると伝える。

支援対象者の姿勢・取り組み例

- 前回のコーチングで話したアドバイスを翌月の活動に反映していた。
- 帰国まで半年程度の期間があるなかで、帰国後のイメージを具体化し行動に移している。
- 落ち込む時もあったが、「せっかく来たのだから」と前向きに取り組み、自ら解決に導くことができたり、成長度合いを感じることができていた。
- 行動力や柔軟性、問題解決能力など、不足しているコンピテンシーを意識して、克服するための行動を起こしていた。
- 自分への課題や思うように成果が見られないことにおいても、どのように取り組むべきかなどの積極的な質問があった。

CCの対応例

- 英語を強化項目に選択している渡航者には、時には接客英語や好きな映画のセリフなど、楽しい英語の話題提供に努めた。
- 行動していることに対しての承認を必ず行う。不安や困難に思っていることを聞き、それをどう克服していくかと一緒に考えた。
- 成果に手応えが感じられないと少しネガティブになっている渡航者には、具体的な活動を聞くことで自信につなげた。
- 頑張ったこと・できていることをしっかりと承認し、自信が持てない点については、小さな目標や方策を一緒に考えた。
- より効果的な行動ができるよう、他の渡航者の例も状況に合わせて提供し、本人が気付いていないことに気付けるようにフィードバックし、新たな視野が開けるようなサポートを心掛けた。



PDCA (Plan-Do-Check-Action) の繰り返し

具体的な行動計画を一緒に考える際には、数値目標を立てると実行しやすくなる。また目標を立てて行動するだけにとどめず、その振り返りをすることで自己成長感の醸成につながる。その時、過小評価になりがちな場合は、第三者として肯定することも大事である。

コーチングのポイント

見守り型	けん引型
・目標達成のための行動を聞く。	・目標をスマールステップにして行動できるようにする。
・行動しやすいように、具体的な数字で目標を設定する。	・自分でできそうな目標を考え、目標を宣言し実行するようにサポート。
・1ヶ月の行動の振り返り。できなかった時は目標を見直し、できた時は次の目標を立てる。	・少しでも成長したところを見付け、根拠のある褒め方をする。
・行動している人には、積極的に新しい行動の提案をする。	・結果を出せなくても、プロセスをフィードバックし、目標の変更と一緒に考える。
・先の見通しを聞く。	・結果が出ていなくても過程を承認する。
・できなかつたことができるようになったら、そのことを褒める。	

支援対象者の姿勢・取り組み例

- 前回決めた行動目標を意識して過ごし、達成度合いや成果を報告してくれた。そのうえで自ら次の行動目標を立てた。
- 月次コーチング時には、前月の課題を自分なりに整理し、実施したこと、実施できなかったことを自分で把握し、アドバイスを求めるなど、積極的だった。
- 渡航の目的である「英語力強化」達成に向け、自宅課題・自主学習も含め、計画的に実行・努力し、主体性や実行力向上が認められた。
- 渡航してから現地での環境を踏まえ、計画や課題を修正するなど、優先順位を考えたり、能力開発に取り組む姿勢が見受けられた。

CCの対応例

- 日々の生活に漫然と流されないよう、普段の行動目標につながるような話をした。
- 1ヶ月の報告や話をしっかりと聞いてから、行動目標の達成度合いを確認し再設定を行うようにした。
- 「帰国までにTOEIC〇点取得」という目標を掲げ、日々活動するよう課題を与えた
(例:「次回までに対策本購入」「洋書を読む」「日記を書く」など)。
- 1ヶ月間、有効に行動できるように、毎月必ず月次コーチングを実施し、強化項目に対する行動を振り返り、翌月の目標を明確にした。
- コーチング前に前回の記録やブログでの状況報告にも再度目を通し、それに基づいてコーチングをした。
- 前向きな渡航者には、状況を聞くことに重点を置き、その状況についてのコメント・アドバイスをすることで適切な関係を維持した。

現地活動の振り返り <

おおよそ数ヶ月ごとに、それまでの渡航全体を振り返ることで、今後の活動計画を俯瞰的に考えることにもつながる。

コーチングのポイント

- これまでの行動と渡航目的の関連性について言語化してみる。
- 肯定的な言い方で承認する。
- 長期間の活動を一連のストーリーにし、そのなかで身に付いた力を言語化してみる。

支援対象者の姿勢・取り組み例

- 月次は毎月実施。これまでの振り返りと次月の目標を具体的に考えていた。体験したことの報告があった。
- 月次コーチング時は、自分がアドバイスを求める出来事や考えていることなど、準備がされていた。
- 自分なりに次への課題を認識し、行動につなげようとしていた。
- 主体性を発揮し、自ら学習環境を整え、レベルアップしていた。

CCの対応例

- この数ヶ月間の出来事からどんな学びがあったか、コンピテンシーのどの項目に関係するか紐づけをした。
- 海外で就労体験したことを大きな自信につなげるよう、本人が気付いていない変化や成長度合いを客観的に評価し、今後のアクションにつながる後押しをした。

就活を意識化

帰国時期が迫るころには、帰国後のことと話を題にし、気持ちを就活モードに変えていく。

コーチングのポイント

- 帰国時期が近づいていることを再認識させる。
- 就職が決まるまでの一般的な期間を伝え、健全な危機感を持たせる。
- 働く意味と一緒に考える。女性の場合は、経済力の重要性なども含め、結婚と仕事の両立についても言及する。
- 就職サイトで気になった会社をチェックしてもらい、気になった点と一緒に考え、希望の業種を明確にする。

支援対象者の姿勢・取り組み例

- 渡航中最後のスカイプコーチングではジョブ・カードの整備に励み、帰国後1週間以内で面接に臨んでいた。
- 自らジョブ・カードを見直したので、見て欲しいという要望を受けた。
- おおよそ帰国2ヶ月前から就職活動を開始することをアドバイスし、そのアドバイスに従って活動した。
- 現地での就職フェアに参加するなど、今できる最大限の努力をしていた。
- 振り返りの時間を取り、今後のキャリア形成について真摯に考え、帰国時期も含めアドバイスを求めてきた。
- 帰国前から就職情報の収集や応募を始めた。
- 現地で就職活動を始め、志望業界での仕事が見付かった。

CCの対応例

- 必要に応じ、志望企業選定の相談や履歴書添削、面接練習を行った。
- 積極的な行動(例:希望する仕事に就いている人に話を聞くなど)を奨励した。
- 与えられたことをただするのではなく、自分で考え行動できるようになるため、職業選択のポイントなど、自分の考えを書き起こして表にまとめ、気になった企業にコンタクトを取ってみることを奨励した。
- 帰国1ヶ月前から、ジョブ・カードを見直すよう促し、就職活動への意識を高めた。
- 渡航中から十分に帰国後へ向けた就職活動(ジョブ・カードや自己PRや求人企業の情報収集など)を実施させた。
- 「次回までに○社応募すること」など、具体的な数値目標を設定し、課題を課した。
- 志望業界や職種について、新聞やメディアで得た情報を提供した。

5 帰国後

❶ 海外体験の振り返り <

帰国後はCCとの対面などで改めて渡航中に身に付けたコンピテンシーを言葉にして評価する。

コーチングのポイント

- 体験を引き出し言語化する。本人は気付いていないが、海外生活を通じてたくさんの能力が身に付いたことをフィードバックする。
- 自身が気付いていない成長や変化を、事実を提示して客観的に承認することで自信を持たせてあげる。

支援対象者の姿勢・取り組み例

- コーチング前に、あらかじめ海外で身に付いた能力を自分なりに分析し、海外体験評価シートでしっかり振り返りができていた。
- 渡航前の自分と、帰国後の成長について（人見知りだったが社交的になったなど）率直に話していた。
- 自分が将来やりたいことと現実とをしっかり捉えたうえで選択を考えていた。
- 質問事項を前もって考え込んでいた。
- 海外経験で培った能力や、渡航前に比べての変化など、自己分析が進んでいた。またそうでなかつたケースでも、コーチングを通じて明確になっていった。
- 渡航目標が明確であり、達成の為に根気強く努力したこと・高い成果を上げたことを共有し、高く評価できた。
渡航前に設定した強化項目「英語力」「コミュニケーション能力」「実行力」が飛躍的に向上していた。

CCの対応例

- 海外生活を1人でやり遂げたことを承認することで、自信をつけ自己肯定感を高めてあげた。
- 成長したという実感が持てるように、できなかつたことよりも、できるようになったことに注目した。
- 表現力の向上と訴求力の強い自己PR文作成のため、支援対象者によっては積極的な介入もした（要約力や言い換えなど）。
- 単に海外に行ったことを売りにしないよう、強みやアピールすべきことを明確にした。

ジョブ・カード作成

ジョブ・カード上に海外体験の振り返りを棚卸しし、個々の企業に応じた自己PR文を作成。

コーチングのポイント

- いかに自分が志望企業の求める人物像にマッチしているかをアピールする。
- 誰が読んでも理解してもらえるような文章を心掛ける。
- 志望動機のポイントを押さえる（「なぜその業界なのか？」「その業界の中でなぜその会社なのか？」
「その会社で自身がやりたいこと、チャレンジしたいことは何か？」）。
- これまでどんな職務を遂行し、どんな能力が養われ、それを業務にどう活かすかを具体的に記載する。
- どんな目標を持って仕事に取り組んでいきたいのか、という仕事に対する前向きな姿勢を書く。

支援対象者の姿勢・取り組み例

- ジョブ・カード、特に自己PRがしっかり言語化できた。
- ジョブ・カードをもとに、自分でさらにアピール力のある経歴書、自己紹介書を作成した。
- 履歴書や職務経歴書作成後の添削依頼やわからないことの質問が積極的だった。

CCの対応例

- 履歴書の自己PRの書き方や表現方法を指導した。
- 渡航者が現地でどんなことにどのように取り組んだか具体的に振り返り、それを自己成長として言葉に表現する。

就職活動の始動

帰国後スムーズに就職活動に取り組めるよう、帰国前からの準備を促したり、就職活動の進め方などの助言をする。

コーチングのポイント

- 必要があれば、就職サイトと一緒に使い、あとで自身1人でも活用できるようガイドする。
- 勤労意欲を高めるため、働き甲斐や意義を伝える。
- 他の渡航者の動きや成功事例を伝えるなどして就職活動始動へのフォローをする。

支援対象者の姿勢・取り組み例

- 就職に対する意識が高く、希望(勤務地・労働条件・給与など)を明確に決めていた。
- 実施する前に自分で動き、求人検索なども積極的に行っていた
(本人自身が渡航中に実行力が身に付いたからとのこと)。
- 渡航中に帰国後の就職目標をかなり明確化していて、帰国後すぐに行動に移していた。
- 帰国後の仕事・生活においても、向学心・向上心が強く、目標を明確化し、努力を積み重ねていた。
- 帰国前に転職情報を収集したうえで、アドバイスを仰ぐ姿勢が見られた。
- 応募先に関して、自分なりに調査しようという姿勢が見られた。
- 些細な疑問や確認も気軽にブログに投稿していた。
- 就職活動の状況を、ブログでその都度報告してくれた。

CCの対応例

- 英語力の向上は目標達成。そこに至るまでのチャレンジと結果を強みとし、どんどん応募するようにアドバイス。
最初は自信がなく、難易度の低い企業を選択しがちであったが、最終的には望む会社・部署へと就職できた。
- 帰国者は労働市場について知識が乏しいことが多いため、情報提供や視野を広げ、
自信を持って就職活動にチャレンジできるようサポートした。

就活の後押し

帰国後の逆カルチャーショックなどで就職活動への切り替えがままならない場合には、面接の練習などを通じて自信を育むと共に、危機感を醸成する。また停滞気味の場合には常に寄り添い励ますよう心掛ける。

コーチングのポイント

- 動けない場合、その原因を一緒に考える。「何がどうで動けないのか」を明確にする。
- 選択肢を広げるような言葉かけをする。
- 英語に固執し過ぎている場合、視野を広げるようなガイドをする。
- 考え過ぎずに、行動を促す。
- 海外で身に付けた能力について再認識する。

支援対象者の姿勢・取り組み例

- 帰国前は大手志向だったが、帰国後に中小企業でも海外とつながりを持てる機会がある、色々チャレンジさせてもらえるかもしれないことに気付き、考えが変わった。
- キャリアチェンジ、正社員・地方での就職希望という条件のもと、「全ては自分の努力次第ですが、自分ではコントロールできない部分に左右されることもあるので、どのように自分のキャリアを形成していくべきなのか迷い始めてしまいました」という素直な気持ちの自己開示があった
(本人の悩み・苦しみを受容し、就職まで、課題をひとつひとつ共に考え解決していった)。

CCの対応例

- これからのことと一緒に考えていくなかで、信頼をベースにCCが感じている本人の志向や強み、向いていると思われることなどを率直に話すことで、就活の方向性に気付く。
- 渡航によるブランクで動き方がイメージできないケースや、これまでの社会経験が浅いケースも多くあるため、何をどう進めていくかを具体化してあげる。
- 「ジョブ・カードの作成」「適職診断」「面接演習」をはじめ、短期間で就職活動が円滑に進行するよう、事前準備をした。
- 些細なことでも気軽に相談するよう伝えた。たとえ不採用でも反省点を挙げてもらい、改善策と一緒に考えるようにした。
- 様々な選択肢を提示し、一緒に考えることにより視野が広がり、納得のいく就職先の選択ができた。

6 考察

渡航者が現地生活を通じて多くの経験をし、成長することは間違いない事実である。そして、渡航前に渡航目的や目標を明確にすることで、現地での活動が活発になり、より実り多いものになることもわかっている。これまで見てきたプロセスから、CCおよび支援対象者の各々の立場から考察をする。

1. 渡航前

CCの関与

- 長期的に関わっていくために、相手を知りたい、教えて欲しいという気持ちを伝えることで信頼関係を深めることが第一歩。
- どんなタイプの支援対象者であれ、目的を正しく設定するために一緒に考える。
- コンピテンシーに対する意識が希薄な支援対象者には、取り組みたい現地活動を起点にそこから得られるコンピテンシーを考える。

支援対象者の姿勢・取り組み

- 帰国後のあるべき姿を漠然とでも良いのでイメージしておく。
- 他力本願ではなく、オーナーシップを持って自己成長するという意識を持つ。
- CCからのアドバイスを受け入れる素直さを持つ。

2. 滞在中

CCの関与

- 常に併走して見守っていることを伝え、支援対象者が良い緊張感を持ち続けるよう計らう。
- 目標を見失わないよう、定期的に渡航目的の見直しや課題を課すなどに務める。
- 短期・中期・長期という異なるスパンで指針を示す。

支援対象者の姿勢・取り組み

- CCからのアドバイスを素直に実践してみる。
- 自分でPDCAサイクルを回し、常に自己改善に努める。
- 帰国前から就職活動への意識を持ち、できる限りの準備をしておく。



3. 帰国後

CCの関与

- 本人が気付かない成長度合いや変化を客観的な事実に基づき、言語化する。
- 勤労意欲を喚起するようCC自身がロールモデルとなることを心掛ける。
- 就職先の選択では視野を広げるような情報提供やアドバイスをする。

支援対象者の姿勢・取り組み

- 海外体験をきちんと振り返り、その成果をアピールできるように整理する。
- 帰国後あまりのんびりせずに、とにかく就職活動を始めてみる。
- 1人で悩まずにCCなどにも相談しながら、自信を持って就職活動に臨む。

第 6 章

就職成功までの 軌跡

1 概要

Global ACE参加者で就職に成功し、職場で海外体験を活かしている体験者に関して、渡航前～帰国後、そして現在に至る過程とGlobal ACEのサポートをどう活用したかについて実情を知るためにインタビュー調査を実施した。

1 調査対象 Global ACEに参加し、帰国した現在就業中の10名にインタビューを実施した。そのうちの6名を紹介する（残り4名は補足資料に掲載）。

2 実施方法 Global ACE事務局が対面もしくは電話で取材した。

3 実施時期 2015年1月～2月

4 調査項目

- (1) 渡航の動機
- (2) 渡航前の就業状況
- (3) 現地での主な活動
- (4) 現地での居住環境
- (5) 就職活動の方法
- (6) 海外就業体験をどうアピールし、何が評価されたか
- (7) 帰国から就職決定までに要した期間
- (8) 就職活動の満足度とその要因
- (9) 現在の業種、職種
- (10) 海外就業体験が仕事にどのように活かされているか
- (11) 海外就業体験を今後どのように活かしていきたいか
- (12) Global ACEのサポートについて

5 調査事項

氏名	年齢※	性別	出身地	参加プログラム	渡航先(国・地域)
A・M 氏	30歳	女	埼玉	ワーキング・ホリデー	オーストラリア パース・ブリスベン・シドニー
W・Y 氏	33歳	女	大阪	ワーキング・ホリデー	カナダ バンクーバー
M・A 氏	26歳	女	大阪	語学研修 ボランティア活動	カナダ トロント
M・Y 氏	26歳	男	大阪	ワーキング・ホリデー	カナダ トロント
M・N 氏	28歳	女	北海道	ワーキング・ホリデー	カナダ バンクーバー
O・M 氏	26歳	女	奈良	ワーキング・ホリデー	オーストラリア ブリスベン・メルボルン

※年齢は帰国時点



海外で広げた創造力や行動力が、マーケティングの仕事に活きている。



A・M氏のプロフィール

年齢

30歳

性別

女性

出身地

埼玉

参加プログラム

ワーキング・ホリデー

渡航先



オーストラリア(パース・ブリスベン・シドニー)

考察

- 明るく、前向きで、物事を楽しむタイプ。たくましく大らかな人柄がオーストラリア人やシェアメイトにも愛され、現地密着型の素晴らしい体験をしてきた。
- 積極性や海外就労体験の他に、キャリア・コンサルタントに気付かされた「やり抜く力」「広い視野による新しい発想」「時間管理力」も存分にアピールして満足できる結果を得た。
- Global ACEのキャリア・コンサルタントは、本人の海外での体験を全て知っている唯一の人で、なんでも相談できる心の支えだった。就活が上手くいかない時も新たな強みを見付け鼓舞し、成功へ導いた。



1. 渡航前

(1) 渡航動機

高校時代、海外に行ってみたいと漠然と思っていた時に、オーストラリアから交換留学生が来た。以前にも増して「外国で生活して、異文化を体験し、英語も学びたい」と考えるようになった。社会人になり、営業職として色々な人に会うなかで、海外青年協力隊や留学で海外生活したことのある人と数多く出会い、海外への思いが強まった。ワーキング・ホリデーで渡航するには年齢制限があるので、それを満たすうちに渡航しようと決意。前職場からは休職にしたらどうかと提案されたが、戻る居場所があると甘えが出ると思い、退職して渡航した。

(2) 前職(業種、職種)

乳製品を扱う会社に3年半勤務。営業とマーケティング業務に携わる。営業マンと営業先を回って市場調査し、新製品のデザイン、企画書作成などに携わる。自分の提案が商品化されたこともある。



2. 滞在中

(1) 活動内容

●パースにて語学学校へ通学(2ヶ月間)

学校は日本人が少なかった。クラスメートやシェアメートからセカンドワーキング・ホリデー制度を教えてもらい勧められた。30歳までにセカンドワーキング・ホリデーを取るにはファーム(農場)で88日以上働く必要があることも知り、ブリスベンに移動する。

●ブリスベンでのファーム生活(7ヶ月)

色々なファームで働く。仕事の募集はバックパッカー宿で毎日張り出され、ハーブやフルーツをピッキングした。

自分以外は全員オーストラリア人で、学校で教えてもらえないような日常会話も習えたり、皆良くしてくれた。交流で心掛けたのは国籍問わず「あいさつする」「こちらから話しかける」「わからない単語を後で調べる」こと。英語の意味や表現方法も気楽に教えてもらえてすごく良い環境だった。自分から積極的に話しかけるようにして語彙力が伸びた。

●シドニーに移る

日系企業の現地事務所で働ければ帰国後の就職に活かせると考え、日系企業の多いシドニーへ移動。まず焼肉屋で1ヶ月働いた。またセカンドワーキング・ホリデーも

取った。

●出版会社で営業職として勤務(6ヶ月)

渡航1年5ヶ月後に日本人向けのフリーペーパー会社に就職し、6ヶ月働いた。広告の営業を担当し、スポンサー探しで日本食レストランやローカル企業などを回った。過去の営業経験をフルに活かせた。営業で色々な人と出会い、独立した日本オーナーなどから話を聞けたことは良い刺激になり視野が広がった。また仕事を通じて英語力も向上した。

(2)居住環境

●ホームステイ(渡航後1ヶ月)

●シェアハウス

ブリスベンとシドニーではシェアハウスで生活。日本人、オーストラリア人、タイ人、インドネシア人、中国人らと一緒にシェアした。渡航前は外国人と暮らすなんて想像もつかなかつたが、他国の人との生活は心地よく、1人でいる時は淋しかつた。掃除しない人、食後片付けしない人などもいたが、価値観の違いもシェアハウスならではとプラスに考えた。料理の視野も広がつた。

●バックパッカーズ(ファームステイ期間)

3. 帰国後の就職活動

(1)就職活動の方法

2年間日本から離れていたので、帰国後は日本モードになろうと努め、新聞やテレビを見て感覚を戻そうとした。

インターネットで就活サイトに登録してエントリーした。6~7社と面接し、その中で食品会社に就職することができた。

(2)海外就業体験をどうアピールし、何が評価されたか

●出版会社での経験:営業としての実務経験、レイアウトを組むなどの創造力があること、英語ができなくても飛び込んでいける行動力や度胸があることをアピールした。

●ファームの経験:未知のことにも臆せずチャレンジできる行動力、過酷な労働もやり抜ける根性、諦めないでやり遂げる力をアピールした。

●今の職場では英語は使わないが、新しいことにチャレンジする機会が多いので、自分のチャレンジ精神と行動力が評価されたのだと思う。

(3)帰国後から就職決定までに要した期間

3~4ヶ月。帰国がお盆の時期だったので時間がかかつた気がするが、担当のキャリア・コンサルタントからは焦らないようにアドバイスされた。

(4)就職活動の満足度とその要因

マーケティングの仕事に就けて満足している。

4. 就業状況

(1)現在の業種、職種

食品会社。マーケティング担当。

(2)海外就業体験が仕事にどのように活かされているか

●業務上、新しい発想を求められるが、海外に行き視野が広がつたことで、新商品を作る際にも固定概念にとらわれない考え方ができ、創造力、発想力が活かされている。提案を褒めてもらえるし、行動が早いとも言われる。

●「先を考えてできることは前もってやる」というタイムマネジメント力と行動力が十分活かされている。

●マーケティングは知らない人の仕事も多い。知らない人の中へ持ち前の度胸で飛び込んでいけるのは自分の強みだと思う。

(3)海外就業体験を今後どのように活かしていきたいか

上司からは、親会社が海外に進出しているので、将来的には海外に出向する社内公募もあるだろうから英語の勉強をしっかりしておくようにと言われている。

将来は英語を使った仕事に就きたいが、就けなくとも、東京オリンピックでボランティアをしたい。

帰国して1ヶ月以内に、海外体験評価シートやジョブ・カードを書いて担当のキャリア・コンサルタントに見もらった。海外での活動を細かく聞かれることで、「自分はこんなこともやつたのだ」と新たな強みを知つて自信がついた。強みや海外での活動をどのように履歴書や面接でPRするかも教わつたので、実際の面接でも上手くアピールできた。

5. Global ACEのサポートについて

帰国後、就活が始まり焦りと不安に駆られる自分を、キャリア・コンサルタントが「海外ファームの辛い労働も耐えたのだから大丈夫」と実体験をもとに励ましてくれたことで、自信を取り戻した。自分の海外体験を誰よりも理解し応援してくれる人がそばにいて、いつでも気楽に相談できる環境が、モチベーションを上げてやり抜ける大きな要因となつた。



英語を磨いて資格を取り、外資系航空会社への就職に活かした。



W・Y氏のプロフィール

年齢

33歳

性別

女性

出身地

大阪

参加プログラム

ワーキング・ホリデー

渡航先



カナダ(バンクーバー)

考察

- 語学学校でTESOL(英語教師の資格)を取り、それをアピールポイントにして、帰国後に英語を使う仕事に就くことができた。
- 語学以外に異文化とコミュニケーションする力、人間性をアピールできたことも、成功の要因になったと考えられる。
- 本格的な就職活動自体が初めてだったので、Global ACEのサポートが大いに役立ったと評価している。



1. 渡航前

(1) 渡航動機

学生の時に、提携している海外の大学に2ヶ月語学研修に行き、もっと外国のことを知りたい、海外での生活を長期にわたってしてみたいと思うようになった。大学卒業時から行きたかったが、経済的に無理だったのでも就職し、資金を貯めた。仕事が忙しくなってどんどん先送りさせたので、30歳になるのをきっかけに仕事を辞めて渡航することにした。

(2) 前職(業種、職種)

大学卒業後、英会話スクールのカウンター営業職に就いた。問い合わせ者にシステムを案内して入学を勧める仕事だった。

その後、弁護士事務所の事務職に就いた。裁判所に出す書類を作ったり、弁護士の秘書業務などに従事したりした。

学校では韓国人の友達もできた。

● アルバイト(6ヶ月)

日本食レストランでキッチンスタッフとしてサラダ場で勤務。

● 北米旅行(ワーキング・ホリデー終了後、観光ビザで2ヶ月)

最後の2ヶ月で北米を旅行した。担当のキャリア・コンサルタントから「海外生活で養った英語力を使う時だから、渡航中の海外体験を振り返りながら、実践で試して」と最高のアドバイスをもらった。

(2) 居住環境

● ホームステイ(1ヶ月)

● シェアハウス

中国系カナディアンがオーナー。上階にオーナーがいて、地下に4部屋。それぞれで自炊。シェアメイトができるだけ話をするようにしていた。



3. 帰国後の就職活動

(1) 就職活動の方法

転職サイトにいくつか登録して、そこで探していくなと思うところを当たり、担当のキャリア・コンサルタントに添削してもらった履歴書を送った。

最終的に、担当のキャリア・コンサルタントに紹介してもらったサイトから応募した外資系航空会社に就職が決まった。



2. 滞在中

(1) 活動内容(ワーキング・ホリデー1年+観光ビザ2ヶ月)

● 語学学校(6ヶ月)

ESLとTESOLのビジネスクラスを履修して学位(diploma)を取得した。日本に帰つてからの就職を意識して、漠然と英語を勉強するのではなく、学位や資格など、何か形に残るもの取得しようと思った。

(2) 海外就業体験をどうアピールし、何が評価されたか

英語を使って1年2ヶ月海外で生活したこと、英語に対する恐怖心を一蹴したこと、現地の学校でTESOLの学位を取ったこと、現地の人とコミュニケーションを取ってきたことで英語力と積極性をアピールした。

何か問題が起こった時の対応について問われ、「国籍関係なく誠実に、自分のことをわかってもらうように気持ちを一生懸命伝える」と答えた。

「返事が一番気持ち良かった」とも言われ、人間性も評価されたようである。

(3) 帰国後から就職決定までに要した期間

2ヶ月

(4) 就職活動の満足度とその要因

満足。要因は、1年2ヶ月海外で自活してやり抜いた自信と英語力。

4. 就業状況

(1) 現在の業種、職種

外資系航空会社の事務職。貨物輸出の部署で、輸出業務を担当。

(2) 海外就業体験が仕事にどのように活かされているか

1年2ヶ月の海外生活を通じて磨いた英語力が基盤となり、専門用語はわからなくとも英文の社内書類やメールの大体の脈絡がわかる。英語を恐れないのは強みになっている。

また、日本では話さずとも空気でわかってもらえることがあるが、カナダではそうではないのではっきり言葉にして伝えるように努めた。こうしたコミュニケーションの取り方も仕事に活かしている。

(3) 海外就業体験を今後どのように活かしていきたいか

今後、日本語教師を目指したい気持ちもある。TESOL(英語教師)を持っているので日本語教師との二刀流で、海外で教える立場になれたらと考えている。1月からは日本語教師の資格を取る準備も始める。

海外に行って、何歳になっても勉強している人を見ると、自分でも後悔したくないと思うようになって、行動力が身に付いた。

5. Global ACEのサポートについて

● 渡航中

スカイプコーチングでは、自分が将来目指す職業に就いている人の具体的な話を聞かせていただいたり、違った視点からのアドバイスがとても役に立った。

目標もキャリア・コンサルタントと決めて実行していくが、ともすると怠けそうになるので月に1度のスカイプコーチングが監視役となりモチベーションを保てた。

最後の1ヶ月、「残り1ヶ月しかない」と焦ると、「働き始めたら1ヶ月もの休みはなかなか取れない。やろうと思えばいくらでも力のつく十分な期間なので頑張って」と言われ、精一杯やり通すことができた。

● 帰国後

海外体験評価シートに記入してキャリア・コンサルタントと棚卸しした。

前職は知人の紹介で就職したため、今回が初めての就職活動だった。ジョブ・カードの作成について的確にアドバイスしてくれたり、転職サイトを色々教えてくれたりして本当に助かった。実際にこの就職もキャリア・コンサルタントが教えてくれたサイトからの応募だった。最後までモチベーションを維持できたのも、時間がないと焦る自分を的確なアドバイスでグッと持ち上げてもらえたからだと思う。



「ファッション関係でグローバルな仕事がしたい」という目標をぶらさず、夢を実現。



M・A氏のプロフィール

年齢

26歳

性別

女性

出身地

大阪

参加プログラム

語学研修・ボランティア活動

渡航先



カナダ(トロント)

考察

- カナダでの語学研修とボランティア活動を通して、「わからないことをわからないと言える勇気」「イエスかノーで意見をはっきり言う」ことを学び、英語力と異文化コミュニケーション力が飛躍的に伸びた。その力を就職活動でアピールできた。
- 帰国後、目標をぶらさないことが成功への近道と自分自身を律したことで、渡航前に思い描いた就職を実現できた。
- 帰国して「早く就職しなきゃ」と焦っていると「焦らなくていい」「大丈夫だから」と言ってくれたのはキャリア・コンサルタントだけ。これが大きな支えとなり理想の仕事に就くことができた。



1. 渡航前

(1) 渡航動機

大学時代に国際関係学を学んでいて、1ヶ月カナダ(バンクーバー)に「異文化理解プログラム」で滞在。いつかもう1度海外で勉強、生活してみたいと考えていた。

社会人として3年間働いて、もう少し英語を使いグローバルに働いてみたいと思い、このまま勤めていてもそのチャンスは少ないとわかったので、一度仕事を辞めて海外で英語を学ぼうと考えた。渡航先は、移民が多くて色々な国から来た人と出会えるカナダに決め、バンクーバーよりも日本人が少ないトロントを選んだ。

(2) 前職(業種、職種)

ブライダル関係(3年間)。新郎新婦のドレスコーディネーターとして、ウエディングドレスやタキシードの提案や、列席者の留袖モーニングの提案などを行っていた。ドレスはインポートものが多かったので会社にバイヤーがいて、海外で買い付けもしていた。そういうつたグローバルな仕事に興味があり入社した。

担当した業務は、お客様から幸せをもらえてやりがいのある仕事だったが、海外と関わることは難しかった。



2. 滞在中

(1) 活動内容

観光ビザで渡航し、複数の学校とボランティア活動で約6ヶ月滞在した。

● 語学学校

自分の学習レベルや目的に合わせて、留学エージェントと相談しながら学校を変え、半年間で3つの語学学校(3ヶ月、1ヶ月、1ヶ月)に通った。

● ワールドパレードのボランティア活動(2ヶ月)

カナダ、ブラジルを含む北米最大の同性愛者パレードの募金ボランティアをした。日本ではボランティア経験がほとんどなく、英語力も不安で、業務の流れもわからなかったが、学校の友達や周囲の人々に助けてもらい、役割を果たすことができた。

渡航前はサービス業だったので「わからない、できない」はタブーとして言えなかつたが、わからないことを「わからない」と正直に言える勇気を持つこと、そうすれば助けてもらえることを学んだ。また、現地の高校生らが目的を持ってボランティアに参加し、頑張っている様子を見て自分も鼓舞された。

● 雑誌の撮影ボランティア

美容院に行った時、美容師に前職の話をしたところ、今度撮影があるからと誘ってもらえた。洋服を着せる

という前職の経験を活かし、着替えの手伝いで洋服を順番に渡したら、撮影現場のスタイリストから評価してもらえた。ヘアメイクさんからは「こういう業界はコネクションが大切。初対面の人ともコネクションを作つておけば財産になる」と教わった。スタイリストには「また機会があったら手伝わせて欲しい」と積極的に申し出た。

(2)居住環境

●ホームステイ(2ヶ月)

フィリピン系の家庭にホームステイをした。日本人がいなかったので英語を使う機会が多くなった。

●ルームレント(4ヶ月)

カナダ人夫、日本人妻、女の子3人の家庭に1部屋を借りて住んだ。

3. 帰国後の就職活動

(1)就職活動の方法

帰国後の就職活動に際して、人生の中でどういう仕事や働き方をしたいのか、自己分析をした。ワークライフバランスの取れた働き方をすることと、英語を使った仕事をするためにTOEICの点数目標を決め、英語の勉強を続けた。

就活は、転職エージェントとハローワークを利用した。

(2)海外就業体験をどうアピールし、何が評価されたか

学校で他国籍の生徒と学び、意見を主張する国民や遠慮する国民、発言の仕方やスピードがそれぞれ違うなかで、自分の意見を言うこと、あいまいではなく「Yes」か「No」かをはっきり言うことを学んだと話した。

今の会社はカンボジアに自社工場があり、現地の人との連絡や、日本人以外の人(韓国人など)ともメールや電話をする必要がある。また、生地メーカーはヨーロッパ系もあり、色々な国の人とコミュニケーションを取らないといけないので、異文化経験は評価されている。

(3)帰国後から就職決定までに要した期間

1ヶ月半

(4)就職活動の満足度とその要因

満足。「ファッション関係でグローバルな仕事がしたい」という目的をぶらさずに就職できた。転職エージェントのサイトの求人を見ると、自分のしたいことと違っていても「あれもいい、これもいい」と色々な可能性が見えてきて、ぶれそうになったが、それでは良い結果にたどり着かないと思い、着実に今すべきことを前に進むようにした。

4. 就業状況

(1)現在の業種、職種

アパレル関係の商社。営業事務。業務内容は工場の生産管理、輸出入の書類の整理などで、書類の90%は英文。

(2)海外就業体験が仕事にどのように活かされているか

リーディングの宿題や授業が役に立っている。メールや電話でのコミュニケーションも渡航前ならできなかつたが、今は自信を持ってできている。

まだ入社2ヶ月目なので、今の内にわからないことは尋ねるようにしている。ボランティア経験で学んだ「わからない」と言う勇気を活かしたい。

(3)海外就業体験を今後どのように活かしていきたいか

トロントで色々な国の人と話してコミュニケーションの大切さを学んだ。その経験を仕事に活かして橋渡し役をしていきたい。

将来はバイヤーの仕事がしたい。世界の展示会やショーに行って買い付けをしたい。トレンドを発信する展示会やショーに関わりたい。そんな将来のステップアップに向け、今、英語を使った実務経験を積んでいる。

5. Global ACEのサポートについて

帰国して1ヶ月後に、海外体験評価シートとジョブカードを記入して対面でコーチングを受けた。担当のキャリア・コンサルタントが美容関係の経験があり、自分の目指す仕事への的確なアドバイスをもらえた。海外生活全体も丁寧に棚卸してもらえて、これから的人生の話もできてとても良かった。

「そんなに焦らなくていい」と言ってくれたのもキャリア・コンサルタントだけ。転職エージェントや両親と話していると、「早く決めないと」と不安と焦りが募ったが、キャリア・コンサルタントが「大丈夫」と言ってくれたのがとても支えになった。

特に印象に残っているのは、撮影のボランティアも1日とはいえ普通の人は経験できないことで、「たまたま声をかけてもらってラッキー」という否定的な表現ではなく「素質を見抜いてセンスを認めてもらった」と発想転換した前向きなアピールを教わったこと。ファッション業界で働いていくにはセンスや人に認めてもらうことが大きなアピールとなることを学び、なんとなくしていたことにもプラス評価してもらえて自信になった。



トロント大学の学生たちとの 交流をきっかけに 大学職員の道をめざした。



M・Y氏のプロフィール

年齢

26歳

性別

男性

出身地

大阪

参加プログラム

ワーキング・ホリデー

渡航先



カナダ(トロント)

考察

- トロント大学のランゲージ・エクスチェンジの集まりがきっかけとなり、大学職員という進路を描いて、帰国後に母校に就職することができた。
- 前職の就活の反省をふまえて、自分の求める仕事が確かめるために「直接足を運んで聞いて調べる」ことを心掛けた。
- Global ACEのオンデマンドWeb講座「就職支援セミナー」が非常に直接に役立ったとの評価。



1. 渡航前

(1) 渡航動機

海外に行こうと思ったきっかけは、大学院を出て就職した後、夏休みに初めて外国人の友人(カナダ出身の韓国人)ができたこと。海外経験のないまま一生を終えるのかと考えた時、自分は海外経験をしたいと思い、退社して渡航。

これから的人生で1年間もフリーになることはないので、「楽しみたい」というのが1番の目的で、語学は楽しむためのコミュニケーションツールという位置付けだった。

(2) 前職(業種、職種)

専門商社(服飾関係)に就職し、営業アシスタントをしていた。業務内容は、営業が受注した服(ブランド)の仕事を受けて、その服を作るのに必要な生地・ボタンを発注し、中国工場に製作依頼して仕入れ、市場に出すというものだった。



2. 滞在中

(1) 活動内容(渡航期間10ヶ月)

● 語学学校(6ヶ月)

トロントの語学学校に通った。英語が第1目的ではないので、日本人も外国人も分け隔てなく付き合った。困

った時は日本人が頼りになるし、出国前にカナダに居住経験のある友人に現地の日本人の知り合いを紹介してもらったのも心強かった。

● アルバイト(3ヶ月)

アルバイトでは英語を伸ばすことを大前提とし、客と接して会話ができるレストランのサーバー職を選択。英語ができれば職業選択の幅も広がると考え、外国でしかできない英語でのコミュニケーション、異文化理解を伸ばすように意識した。

● ランゲージ・エクスチェンジ

トロント大学で月1回、ランゲージ・エクスチェンジに参加し、日本語やアジア専攻のトロント大学生と交流した。会話は日本語中心になったが「日本のこんなところが興味を持たれている」など、見聞を広げることができた。また、このイベントに参加したことが、大学職員を希望するきっかけとなった。当時のメンバーとは今でも交流している。

● 旅行(ニューヨーク、ケベック、カルガリー、モントリオール)

これから的人生でこのように時間のあることは2度とないと考え、今できることを最大限に楽しみ実行するために、常に行動していた。

(2) 居住環境

● ホームステイ(1ヶ月)

カナダに関する情報発信ウェブサイトで日本から探

した。不安だったので韓国人の友人にも相談に乗ってもらった。

●シェアハウス(2ヶ所、計8ヶ月)

1軒目はカナダ人オーナーとアメリカ人とのシェアで環境良し。

2軒目はフィリピン人オーナーのシェアハウスでケニア人、ケーマン諸島の人とシェア。安いが地下室でネズミに苦労した。

3. 帰国後の就職活動

(1) 就職活動の方法

- 就職サイト、人材エージェントに登録
- Global ACEのWeb講座を視聴
- 色々な業種のコネクションをあたる
- 足を使った就活

大学職員を志望していたので、大学のキャリアセンターに足を運び、色々な話を聞いた。仕事の内容を聞いて調べ、自分の求める仕事かどうか確かめた。そのなかで卒業後3年末満なら新卒扱いと知り、母校や他大学に応募した。

母校ではホームページからOB訪問を申し込んだり、キャリアセンターの人から職員を紹介してもらった。その結果、母校の職員に採用された。

(2) 海外就業体験をどうアピールし、何が評価されたか

特に聞かれなかつたが、足を運んで直接集めた情報があるから自信を持って面接に臨めた。母校の理工学部大学院卒なので、研究関係の部門で母校を世界に広めたいという希望を持っていた。結果として、採用はグローバル教育推進室に配属された。海外での経験が評価されてこの部署へ配属されたと想像する。

(3) 帰国後から就職決定までに要した期間

3ヶ月半

(4) 就職活動の満足度とその要因

満足。その要因は、ギャップをなくす努力ができたこと。内容もわからず就職した前職の反省をふまえて、自分の望んでいる仕事かどうか、足を運んで職員の話を直接聞いて調べた。就業で大切なことは、組織でどんな存在になりたいかということ。今は母校を世界に広めたいという志を遂げるためにキャリアアップしたいと思う。嫌なことも苦にならないほどのモチベーションがある。

4. 就業状況

(1) 現在の業種、職種

母校の学事局。グローバル教育推進室。担当業務は留学サポートで、海外の提携校に学生を送り出す業務。学生の相談にも乗る。

2015年4月からの正規採用だが、2014年9月から契約社員として勤務している。

(2) 海外就業体験が仕事にどのように活かされているか

日本食レストランでの仕事を通して、「聞くこと、聞かることは限られている」と悟ることができた。どんな仕事でも覚えることには限りがあることがわかったので、経験不足による無知を怖れなくなった。

(3) 海外就業体験を今後どのように活かしていくいか

1つの仕事で覚えることに限りがあることはわかっているが、学生の質問に対する先輩の話を聞いていると知らないことが多いので、海外で身に付けた積極性を武器に様々な経験を積んで必要な知識を増やしたい。

5. Global ACEのサポートについて

海外体験評価シートやジョブ・カードを記入してからの、キャリア・コンサルタントとの対面コーチングはとても話しやすく、あっという間の2時間だった。

話すことに苦手意識がある自分に「喋った感じの人柄が良い」と肯定的に捉えてもらえて嬉しかった。「面接で上手く話せなくても、相手はどれだけ調べてきたかを話している感じでわかる」と言われたのが励みとなり、自分は誰よりも大学のことを調べようと心掛け、直接出向いた。

また、日本の社会は、はみ出ると這い上がれないと消極的に考えていたが、友達からも「お前のキャリアは見かた次第では良くも悪くも見える」と言われ、自分は逆に他の人が歩んでいないキャリアを売りにしようと思った。そんな時、Global ACEのセミナー動画を見て、「自分はこういう(退社して海外に出る)選択をしたのだ」と気楽に考えることを学び、どうしても大学に就職するんだとモチベーションを上げた。友人の助言とセミナー動画が役に立ち、自分のキャリアを最大限に利用しようと邁進し、望みどおりの就職を勝ち得ることができた。



看護の視点で向き合った海外体験 をインターナショナルナースの 育成に活かしたい。



M・N氏のプロフィール

年齢

28歳

性別

女性

出身地

北海道

参加プログラム

ワーキング・ホリデー

渡航先

カナダ(バンクーバー)

考察

- カナダで医療英語を学び、現地の病院を積極的に見学した経験を、「インターナショナルナースを育てる」という新規プロジェクトで活かそうとしている。
- 専門スキルがある場合は、そのスキルに海外で強化した英語力を付加してスケールアップさせることで仕事の選択肢がさらに増える。
- 元上司からのヘッドハンティングを受けて帰国前に就職が決まつたので、就職活動はしていないが、Global ACEのサポートが現地での気づきやモチベーション維持に役立っている。



1. 渡航前

(1) 渡航動機

英語や海外の文化に興味を持っていた。看護師として内科病棟の終末期の患者さんと関わっているうちに、人生は一度きりと思い知らされて、死ぬ時にやりきったと思える人生にしたいと思った。今の自分の人生で何ができるか振り返って、やり残したことは留学だと思った。とはいえ、看護師の仕事は辞めたくなくて3年悩んだ末、ワーキング・ホリデーでの渡航を決めた。

(2) 前職(業種、職種)

内科病棟の看護師。

カナダの看護を見る機会を語学学校から与えられた。自分でも患者として病院に行ったので計5回くらい見学した。患者には触れられなかつたが、看護師の視線の投げ方、立ち居振る舞い、食べ物など、視覚的な部分で学べた。日本との違いは、日本は細やかな分、気にし過ぎる面もあるが、カナダはフレンドリーでおおらかであるなど、医療現場でも異文化を学べた。医療レベルは日本の方が優れているという発見もあった。

- 旅行(1ヶ月、日本からの友人のおもてなしでニューヨークを旅行)

●イベントに参加

週末は色々なイベントに参加して現地生活をフルに楽しんだ。ジョギング、ホームパーティ、映画、クリスマスイルミネーション、サンタのパレード、企業や自治体のイベント、ゲイパレード、ランタンを飛ばすなど、イベントは毎週のようにあった。それらは情報誌や口コミで探した。

(2) 居住環境

●ホームステイ

語学学校の3ヶ月は、フィリピン人宅でホームステイ。他にメキシコ人、ブラジル人もステイしていた。ホームパーティの時は皆で一緒に食事した。

●シェアハウス

日本人2人とシェア。ホームステイの経験から比較的きれい好きなアジア人の家を探して日本人と一緒にした。



2. 滞在中

(1) 活動内容(渡航期間10ヶ月)

●語学学校(3ヶ月、1ヶ月半)

バンクーバーの語学学校に入学。フルタイムで3ヶ月間、グラマー、リスニング、発音矯正の他、医療と接点を持っていたかったので医療英語も学んだ。

帰国前にも、来たからには英語をもっと学びたいと考え再び学校に入学。フルタイムで1ヶ月半、弱点だった文法などの基礎固めをして帰国した。

●病院見学



3. 帰国後の就職活動

(1) 就職活動の方法

渡航中に元の上司からメールでオファーがきて、ヘッドハンタントされた。それまでの準備としては、看護の英語を勉強し、現地の病院を視察見学した。

(2) 海外就業体験をどうアピールし、何が評価されたか

どういうことを海外で勉強したか、感じてきたかを質問された。病院を見学した経験や英語力をアピールして評価されたと思う。大学病院でインターナショナルナースを育てる取り組みが始まったので、上司が自分を適任と思ってくれたのではないだろうか。上司からは「そのうちインターナショナルナースの教官にしたい」と言われており、医療英会話を病院で学ばせてもらっている。

(3) 帰国後から就職決定までに要した期間

帰国前に実質決まっていた。

(4) 就職活動の満足度とその要因

満足。インターナショナルナースを育てる指南役としてヘッドハンティングされた。過去6年間の看護師としての実績も評価されているかもしれない。



4. 就業状況

(1) 現在の業種、職種

大学病院勤務。呼吸器内科の病棟の看護師。外来には出ない。

終末期の病棟なので、その人らしく生きられるサポートと一緒に考えられることが嬉しい。

(2) 海外就業体験が仕事にどのように活かされているか

カナダで一番感動したことは、町でぶつかると謝ったり、「良い1日を」と皆が気持ち良いあいさつや笑顔だったり、目を合わせて話すなど、基本中の基本のことを当たり前にできていること。そうした人ととの基本的な関わりを自分も心掛け、後輩にも指導していこうと思っている。

日本は上下関係が厳しく、学生時代に日本の病院へ実習に行くと学生は邪魔者扱いだった。しかし、カナダの病院では忙しくても相手をしてくれて、「学ぼうとする人には教えます」という姿勢に感動した。人として尊重されることの大切さを知り、それが看護にも出ていることをカナダで学んだ。

(3) 海外就業体験を今後どのように活かしていくいか

医療英語を学ぶことで自分の幅が広がった。海外の患者さんが年々増加しているので、医療英語を皆さんに伝える役を担っていきたい。将来の看護師にとって英語は必須。ベトナムやフィリピンからも看護師を招かない間に合

わなくなる時代に向け、インターナショナルナースを育てる教育者(看護師の先生)になりたい。実際、渡航前から大学に在籍していて、この春に大卒資格を取り、大学院に行くので、教育者になるのは叶わない夢ではないと思う。大学院、助手、そして助教授と上がっていくのが今のビジョン。



5. Global ACEのサポートについて

● 初期コーチング

最初のコーチングで担当のキャリア・コンサルタントから「言いたくないことは言わなくてよいから」と言われ、他人の領域に土足で踏み込まないマナーと品の良さを感じ、「この人なら信頼して話せる」と逆に何でも話すことができた。

● 滞在中

キャリア・コンサルタントと共に目標を具体的に立てることで、自分のすべきことがより明確に見えた。目標設定シートは2枚印刷して、いつも見えるところに置いた。心のたるみやぶれが生じた時、初心に返れるように使っていた。

能力開発の面では、具体的にどのように能力を伸ばすかをキャリア・コンサルタントが考えてくれたので実行しやすかった。

また、日常生活の愚痴を肯定も否定もせずに聞いてくれて、自ら考えるように導いてくれた。自分も将来教育者を目指しているので、アドバイスの仕方のお手本にもなった。

「やり残したことがないようにしたい」という私の意図を汲んで色々アドバイスをくれた。帰国直前のコーチングでは「悔いはないわね」というやり取りをするほど、半年間でやりきった。

カナダでの経験と同様、自分にとってかけがえのないものは、働く女性として、人として、母として「人生の師」と思えるキャリア・コンサルタントと出会えたこと。彼女を目標にこれからも頑張りたいと思う。

● 帰国後

就職は既に決まっていたので就職支援のサポートはなかったが、帰国後すぐに海外体験評価シートを使って担当のキャリア・コンサルタントのコーチングを受けた。渡航中は気付かない多くの気づきを得た。また、インタビューを受けたことが自分の半年をつぶさに振り返る良い機会となった。



得意の英語力を磨いて、 念願だったオーストラリアと 関わる仕事に就いた。



O・M氏のプロフィール

年齢

26歳

性別

女性

出身地

奈良

参加プログラム

ワーキング・ホリデー

渡航先



オーストラリア(ブリスベン・メルボルン)

考察

- ワーキング・ホリデーを通して、「海外で英語を学び仕事に活かしたい」という夢を実現させることができた。
- 帰国前に、会話力も必要なケンブリッジ検定の資格を取得したことが、帰国後の就職活動のPRにも活かせた。
- Global ACEの担当キャリア・コンサルタントは就職活動の一番のサポーターとして頼りにしていた。就職支援セミナーや会社ごとに添削してもらった履歴書サポートは特に有効と高く評価。



1. 渡航前

(1) 渡航動機

中学のころから英語が得意で、いつか海外で英語を学び仕事に活かしたいと思っていた。社会人3年目に会社が久しぶりに新入社員をまとめて採用したので、引き継いで辞められる良い機会と考えた。

(2) 前職(業種、職種)

機械メーカーの営業事務。法人の顧客相手に書類を作成したり、機械の説明を行っていた。



2. 滞在中

(1) 活動内容(渡航期間10ヶ月)

●語学学校(3ヶ月、2ヶ月半)

ブリスベンの語学学校で3ヶ月、英語を学んだ。さらにワーキング・ホリデー後、学生ビザを取得し、就活のことを考えてメルボルンの語学学校に2ヶ月半通い、英語のケンブリッジ検定の資格を取った。

●オペア(3ヶ所、計8ヶ月)

オーストラリアには子どもだけを家に残してはいけないという法律がある。共働き夫婦のどちらかが帰宅するまで宿題や遊びの世話、ベビーシッティングなどをする代わりに宿、食事を無料提供されるオペアをメルボルンとバースで経験した。

(2) 居住環境

- ホームステイ(渡航後2ヶ月)
- シェアハウス(台湾人とシェア)
- オペアファミリー宅(8ヶ月)



3. 帰国後の就職活動

(1) 就職活動の方法

担当のキャリア・コンサルタントから教えてもらった紹介予定派遣(6ヶ月の試用期間を経て正社員になれる。未経験でも採用してもらいやすい)のサービスを中心に、インターネットで派遣会社に4社登録して並行して企業探しをした。

その結果、メルボルンに本社がある食品メーカーに就職できた。

(2) 海外就業体験をどうアピールし、何が評価されたか

直接で海外経験についてはあまり聞かれなかったが、「ケンブリッジとは何?」と聞かれた時に、現地の学校で学んだことや、オペアで働きファミリーとのコミュニケーションを通して英語が身に付いたことを織り交ぜて話した。ケンブリッジ検定については「読み書き・聞く」以外に「会話力」も求められることを伝えてアピールした。そこは評価されたと思う。

本社がオーストラリアにある会社なので縁を感じることも伝えた。

最終面接で社長に「夢はなんですか？」と聞かれ、「色々な人とコミュニケーション取れる人間になりたい」と答えた。

(3) 帰国後から就職決定までに要した期間

4ヶ月。目標よりは時間がかかった。

(4) 就職活動の満足度とその要因

大満足。要因は、オーストラリアに行っていたという渡航経験と、前職での実績。「こんなことができたら素敵」と思っていた仕事であり、オーストラリアの食肉を輸入する会社は本意だった。

れないもので、非常に助かった。

Global ACEの就職支援セミナーに参加できたのも大きなプラスとなった。面接での印象、企業へのアピールの仕方、ストラテジーや気持ちの面の話も聞くことができ、これから就職活動を頑張ろうと自分を盛り上げられた。

採用結果がだめでも「次、次」と励ましてくれたので、自分もその言葉通りにやろうと思い前向きに取り組めた。モチベーションの維持には欠かせない存在だった。

4. 就業状況

(1) 現在の業種、職種

食品メーカー。本社メルボルン。東京本社(6人+社長)と大阪支社(3人)がある。

営業サポート、営業事務、貿易事務と色々なことができると言われている。日本の規模は小さいが長く働いている人が多く、福利厚生も整っているので主婦も両立できる。

(2) 海外就業体験が仕事にどのように活かされているか

他の人の意見を受け入れる垣根が低くなった。聞くばかりでなく自分の意見も言えるようになり、コミュニケーション力が高められた。視野が広がった。

(3) 海外就業体験を今後どのように活かしていきたいか

語学力をこれからも伸ばしていきたい。海外でできた友人やファミリーとの交流を大切にし、英語を忘れないようにキープしたい。

現職でのキャリアアップも可能で、営業まではいかないが、事務として顧客と取引をやっていきたいならオーストラリア研修もあると言われている。

5. Global ACEのサポートについて

担当キャリア・コンサルタントの第一印象は、話しやすく信頼できる人だということ。なんでも相談しやすくて、自分で気付かないことを色々教えてもらった。

帰国後は就職活動の一番のサポーターとして頼りにしていた。帰国後1~2週間でジョブ・カードを中心にコーチングを受けた。帰国直後の海外体験の棚卸しは、記憶が鮮明なのでとても良かった。

受ける会社ごとにジョブ・カードを添削してもらい、職務経歴書に反映することができた。同じ経験でもアピールの仕方で文章が大きく変わることもわかった。添削していただいたジョブ・カードは自力では到底仕上げら

第 7 章

相談事例、反省事例

1 概要

Global ACEの支援対象者から受けた相談の中から代表的なものを抽出し、回答例を添えて紹介する。
また、渡航前～帰国後、就職活動サポートにおける反省事例にも触れ、今後の検討課題について考察する。

2 相談事例



1. 渡航前

Q	A
渡航中に何をしておけばいいのでしょうか？	<p>海外生活を帰国後の就活に結び付けるために以下の2つのことをお薦めする。</p> <ul style="list-style-type: none">● 海外のコミュニティ(インターンシップ、ボランティア、アルバイト、サークル活動など)に参加し、主体的に行動し、周囲に好影響を与えるエピソード作りを行うこと。語学力の向上や、自己成長が期待できるため、就活で話せるエピソードができる。● 語学力を示せる証を残すこと。何かしらの証拠を提示できないと、海外に遊びに行ったのかと思われてしまう恐れがある。
帰国の時期によって就活に有利、不利はあるのでしょうか？	中途採用枠の場合、欠員募集が多いため、通年募集している。したがって、特に時期的な有利不利はないと考えてよい。
渡航前に語学を勉強しておきたいのですが、どんな勉強をしておけばいいでしょうか？	現地に到着した後からすぐに語学を使う必要があるため、生活するのに必要なフレーズを覚えておくとよい。書店に行くと場面ごとの表現集などがあるので、1冊購入し、現地で使いそうな表現を覚えていく。それだけでも安心材料になるし、モチベーションアップにつながる。海外渡航支援エージェントによっては、無料英会話レッスンなどがあるので、それらに参加してみるのもよい。

出発前になって漠然と不安を感じるのですが。	不安を感じることは自体は決して悪いことではない。それだけ慎重に行動するようになる。 不安や疑問点はエージェントのカウンセラーやキャリア・コンサルタントに質問し、情報を集め、できるだけ事前に不安を解消すること。不安が消えると自分の決意が固まる源となる。つまり、不安があるほど、自分の決意が固まる源が多いわけなので心配ない。どうしても不安が払しょくできない時は、不安を解消しようと頑張るのではなく、今自分ができることから始めること。目の前のことに集中すれば、不安はなくなる。
ワーキング・ホリデーの目的が漠然としているのですが、大丈夫でしょうか？	例えば、なんの制約もないとしたら、海外から帰国した時、自分はどんな姿になっていたいかを自由に想像してみる。想像するだけで思わずワクワクするぐらいのものが良い。「語学を流暢に話せるようになりたい」とか、「世界中に友達を作りたい」など、渡航したいと考えた時に、何か動機があったはず。そこを目標に落とし込むことをお勧めする。キャリア・コンサルタントと一緒に考えることで、より明確になる。

2. 滞在中

Q	A
現地の友人ができるのですが、どのように接点を持てばいいのでしょうか？	まずは現地のコミュニティに入ることをお勧めする。なんらかの趣味サークルやスポーツサークル、ボランティア、アルバイト、インターンシップなどであるが、現地の情報サイトや掲示板(クラシファイド情報)を利用すると見つけやすい。 その他、知人から現地の人を紹介してもらうのも1つの手段である。
アルバイト先やインターンシップ先、ボランティア先はどのように探せばいいのですか？	一例として下記の方法がある。 <ul style="list-style-type: none"> ●現地の情報サイト(craigslistその他)や掲示板(クラシファイド情報)を利用 ●留学エージェントの現地オフィスの掲示板などを見る ●日本人向けのフリーペーパーや地域紙から探す ●友人から紹介してもらう。特に帰国する友人から紹介してもらうと見付けやすい ●直接現地の会社やお店にアプローチする。その際に履歴書を持参

Q	A
あと1ヶ月しかないのですが、就活の準備は何をしておけばいいのでしょうか？	<p>例えば以下の準備は有効と思われる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●就活サイトへエントリーを開始する ●就職支援エージェントへ登録する ●帰国後すぐに就活が開始できるように、少しずつ履歴書、職務経歴書も書き始める。これらのフォーマットは、インターネットからダウンロードが可能 <p>志望先が未定の場合は、就活サイトで実際の求人情報を見るとイメージが湧く。自分の関心のあるキーワードで検索すると、それに関連した求人が出てくるので、その中から検討するのも1つの手段である。</p>
インターンシップをしているのですが、補助的な仕事しか回してくれません。意味が見出せないので辞めようと思うのですが、どうでしょうか？	<p>語学力のハンディがあるため、基本的にどの企業であっても補助的な仕事が大半である。そのため、上司から言わされたことしかやらなければ補助的な仕事しか回ってこない。</p> <p>提案としては、上司から言わされた仕事は、ただこなすだけではなく、言われた以上のパフォーマンスを出すように心掛けること。例えば、2日でやるように言われたのであれば、質を落とさず1日で仕上げるなど。その上で、「こんな仕事もやらせてください」「こんな仕事は得意です」と直談判してみること。1、2回断られたとしてもめげずに、ことあるごとに直談判する。海外では自分から働きかけなければ物事は進展しないし、この行動は自身の主体力向上にもつながる。</p>
語学力が思うように身に付きません。何か良い方法はありますか？	<p>語学力アップを図るには、やはり人と話す機会を増やすことである。</p> <p>机上だけでは「読み」「書き」はできても、コミュニケーション力は身に付かない。</p> <p>そのためには、なるべく外へ出て会話をする機会を意識的に作ること。</p> <p>例えば、現地のlanguage exchangeや、meetupなどを活用したり、ボランティアやサークルなどのコミュニティに参加し、現地の人達との交流を図ること。もし、授業などでプレゼンテーション力を磨きたいのであれば、TEDを活用し、自分が興味のあるテーマを英語の字幕を付けて繰り返し見て、英語表現を覚えたり、身振り手振りも真似てみることも有効かと思われる。</p>

やりたいと思うことにチャレンジしようとしても続きません。あるいは、なかなか着手できずにズルズル時間が経過してしまいます。

理由は以下の2つが考えられる。

- 「本当にそれをやりたい！」というエモーションがない

自分がやりたいというよりも周囲の常識的な視点から思いついただけで、心から取り組みたいと思っていない。

- 不安である

未知の領域だったりすると自信もないため一歩踏み出せない。

前者の場合であれば、目標を「他人視点」からではなく、「自分視点」に戻し、目標自体を変えること。

後者の場合は、大上段に構えず目標から逆算して、やるべきことを日々の自分の行動、プロセスまで落とし込むこと。例えば、TOEICで800点を取るという目標を掲げた後は、そのために自分の弱点を知るために、まずは実際に試験を受け自分の弱みを把握する。仮にリスニングが弱いのであれば、リスニング教材を選び、「毎日2ページずつ実践する」というように日々のプロセスまで落とし込む。その日にやるべきことが明確化できるので継続しやすく取り掛かりやすくなる。



3. 帰国後

Q	A
自分のやりたいことが見付からない。	<p>「やりたいこと」ではなく「やりたくないこと」を書き出す方法も有効な手段である。例えば、「人に頭を下げたくない」「セールスで数字を追うのは苦手」「事務作業は嫌い」「人間関係が苦手」など。その過程でやがて自分が「やりたいこと」がうっすら見えてくることもある。</p> <p>その他の方法としては、就活サイトを利用し、実際の求人情報を見ること。そして「自分は何をやりたいのだろう?」という視点ではなく、「この仕事であれば、自分は好きになれるかな?」という「好きになれるうこと」視点で求人を見ると「やりたいこと」につながることもある。</p>
海外で得られた自分の強みや弱み、成長などがわからず自信がありません。	<p>海外生活をすると自分でも気付かない能力は誰でも身に付いている。</p> <p>気付き方の一例としては、海外生活を月ごとに分け、自分のモチベーションのアップダウンをグラフにしてみると。どんな時にモチベーションが上がり、どんな時にモチベーションが下がったのかに注目すると、モチベーションが低いところから上がる過程には自分の強みや成長が見えてくる。逆に、モチベーションが高いところから下がる過程には、自分の弱みや課題が見えてくる。</p> <p>この作業をキャリア・コンサルタントと一緒に行うと、客観的な観点からアドバイスをもらえるので効果的である。</p>
帰国したのですが、TOEICスコアが500点と自分の思う語学力が身に付かなかったため、そのまま就活をするよりも、再度別の国に渡航してTOEICスコアを上げようかと迷っていますが、どう思いますか?	留学目的を十分検討する必要がある。必ずしも2度目の渡航で満足のいく語学力アップが図れる保証はないし、企業は語学力のみで採用はしない。職歴、海外で身に付けたヒューマンスキル、専門性などを総合的に判断し、採用を決定する。TOEICのスコアであれば国内の勉強でも十分スコアアップは望める。2度目の渡航の必要性を再度しっかり考えた方がよい。



4. 就職活動

Q	A
帰国した後、どれくらいの期間で就職先は決定するものですか？	帰国後すぐに就活を始める人もいれば、しばらくしてから就活を始める方もいるので一概には言えないが、早くも2ヶ月以内、遅くも半年以上かかっているようである。平均4ヶ月程度が1つの目安と考えられる。
帰国後しばらくゆっくりしてから就活を開始しようと思いますが、大丈夫でしょうか？	帰国後あまり期間を空けてしまうのは得策ではない。ゆっくりしたい場合であっても、1~2週間くらい休暇を取つたらできるだけ早めに就活を開始した方がよい。
どのように就活を始めればいいのでしょうか？	<p>まずは、ジョブ・カードなどをまとめ、これまでの自分自身の棚卸しを行い、自分の方向性を決めたうえで、下記のようなアプローチを検討する。</p> <ul style="list-style-type: none">①就活サイトを利用する②ハローワークで相談する③就活エージェントに登録して求人を紹介してもらう④企業のHPの採用ページからエントリーする⑤知人から求人の紹介を受ける⑥直接企業に連絡を取り、アプローチしてみる <p>最も一般的な方法は、①②である。 前職のキャリアがある程度あれば、③「就活エージェント」に登録し、求人を紹介してもらうことも有効な手段である。 また④も有効である。上記の手段で求人情報を出さずに、自社のHPでしか募っていない企業も少なくない。 そして⑤も、人づてでしか知り得ない求人も多いので、積極的に周囲に自分が就職活動をしていることを話すのも有効と思われる。</p>
英語を使う仕事をしたいのですが、なかなか内定がもらえません。	英語を使う仕事という『ふるい』にかけてしまうと、可能性を狭めてしまう。 英語を使わなければ、何をしたいのか、という観点で求人を探してみること。 グローバル時代のなか、現在英語を使うシーンのない会社であっても将来的に英語を使う必要性に迫られる可能性は大いにあり得る。

Q	A
語学学校の修了証やインターンシップの修了証は添えた方がよいでしょうか。	応募書類と一緒に提出してもよい。ただし、評価されるかどうかは企業次第である。
自己PRの書き方がわかりません。ポイントはなんでしょうか？	まずは、企業の求める人物像に自分が合致していることをアピールすること。 求職者の能力も大事な要素だが、企業は自社のニーズに合致している人物かどうかを見極めて採用を決める。
志望動機のポイントを教えてください。	例えば以下の3点が入っていると効果的と思われる。 <ul style="list-style-type: none"> ●なぜこの業界なのか ●その業界の中で、なぜその会社なのか ●その会社でチャレンジしてみたいことは何か
面接での注意事項を教えてください。	特に海外体験者は以下の点を留意するとよい。 <ul style="list-style-type: none"> ●権利主張を控える 海外では普通のことだが、日本の企業ではまだまだ権利主張に関しては抵抗感を抱く企業は少なくない。「自分が企業に貢献する」という姿勢で面接に臨むこと。 ●「語学を使いたい」という気持ちをあまり前面に出さない ケースバイケースであるが、その企業に入社したいというよりも、英語を使いたいだけと捉えられてしまう恐れがある。 ●渡航理由や得られた能力をわかりやすい言葉で伝える きちんと伝えられないと、せっかくの海外体験を評価してもらえず誤解を招く恐れがある。

3 反省事例



1. 渡航前

【ラポールの構築】

- 約束に対しての意識が低い。
- 真面目すぎて自分の殻を破らない。
- 自身が何もしなくてもCCからアドバイスをもらえるという受け身の姿勢。
- 能力開発シートなどへの記載が場当たり的である。

【自己肯定感の強化】

- モチベーション維持に苦労している。
- 常に何かに急かされているような追いつめられた様子でゆとりがない。

【過去のキャリアの棚卸し】

- 英語力が一定基準に達していない。
- ジョブ・カードの職務経歴欄の記入が雑である。

【渡航目的の明確化】

- 渡航の目的意識が希薄で、明確な目標やビジョンに欠ける。

【目標の設定】

- 目標設定自体の意図が理解できていない。
- 記入シートの記載が大まかで、CCがなんとかしてくれるという甘えが見受けられる。当事者意識が感じられない。

【能力開発計画の作成】

- 能力開発の強化項目は決められるが、どのように向上させていくか、手段が考えられない。実際にやって、働いてみないとわからないという理由で計画設定に消極的である。
- 就職支援はしてもらいたいが、能力開発などには消極的。



2. 滞在中

【渡航直後の不安の解消】

- Webシステム(ブログ)のチェックを怠る。
- 連絡が途絶え、状況把握ができない。
- 「しなければ」という気持ちと、「したくない」「まだ自信がない」「延長したい」「先延ばししたい」など、意思決定に不安を感じている。現状を「受け入れる姿勢」が整っていない。

【行動の後押し】

- あくまでも受け身(指示待ち姿勢)で、積極性が感じられない。
- 積極的に動かず、色々と提案しても何事に対しても否定的。

- トラブルを避けたり、日本語環境に安住するなど、安易な方向に流れている。
- 現地でしか経験できない機会を活かしていない。
- 動けない理由ばかりを考えて、できることを自身で制限してしまう。
- 英語力向上のコツ、インターンシップの仕方を質問するだけで、自ら行動しようとはしない。

【PDCAの実施】

- 能力開発計画の課題に取り組んでいない。
- 目標を忘れ、日々のルーチンワークに流されてしまう。
- 問題解決することを先送りする傾向が強い。
- 語学力が向上しないことで諦め、当初の目的を投げ出してしまう。

【活動の振り返り】

- 2年間滞在の後、さらに半年延長。渡航の成果を見出せずに模索が続く。
- 現状の把握が不足（自分自身と現実、やりたいこととのギャップなど）。

【就活の意識づけ】

- 長期間、農場などで仕事をしていたため、時間の感覚がなくなった。

3. 帰国後

【海外体験の振り返り】

- あくまでも受け身（指示待ち姿勢）で、積極性を感じられない。
- 社会で必要とされる英語力のレベルを知ろうしない。
- 帰国後、持ち帰ったものが明確にできない。

【ジョブカード作成】

- ジョブ・カードについて第三者に渡す書類という意識が感じられない。
- ジョブ・カードが自分勝手な記載に終始している。

【就職活動の始動】

- 仕事探しの方向性が定まらない。
- 再渡航の検討や英語力テストを優先して、仕事探しが後回しになる。
- 帰国直後から、「短期」「とりあえず」のアルバイトや派遣の仕事を始め、場当たり的でその場しのぎである。
- 海外経験があまり良いものではなかったため、それを就活につなげたいとは思えず、渡航経験と就活を別のものと位置付けたい考えから抜け出せない。
- なんとなく他人事のような印象。

【就活の後押し】

- 憧れやイメージだけでミスマッチの業界や企業を選び、やりたいことや英語環境に固執。
- 目標とする企業名が挙がっても、突き詰めれば動機が薄い、企業研究もしていない。
- 求人情報の収集まではしても、そこから応募に踏み出せない。
- 希望する仕事に必要とされる要件を満たしていないにも関わらず、その領域に絞り込んで就職活動をしたがる。

4 考察

全般的に言えることは、勤労意欲が低く、他力本願で自己中心的な側面があり、社会人としての規律性も乏しく、場当たり的で計画性がないような渡航者は、海外体験から得るものも少なく、就職活動にも苦戦しているようである。

今回の反省事例のようなケースは稀であるが、キャリア・コンサルタントの支援が水泡に帰すことのないよう、支援対象者の意識付けなどの強化は必要である。

第8章

総括

これまでの章を踏まえ、グローバル人材としてのエンプロイアビリティを高める海外体験のあり方について考える。



1. 渡航者のタイプについて

自己肯定感とキャリア志向の2軸で4タイプに分けることができるが、どちらかが低い場合は、自身が高めるための強い自覚を持つか、あるいはキャリア・コンサル

タントのような存在の支援に頼るなど、何かしらの意識改革がなされると、海外体験をより有益なものにできると思われる。



2. 渡航動機と目的について

渡航動機については、H26年度調査では以下の4つに分類している。

①現状打開志向が強い層

(動機例)

職場環境・企業文化が合わなかつた、起業をしたかつた、仕事にやりがいを感じられなかつた、自分に合う仕事を見付けたかつた、キャリアチェンジをしたかつたなど

②国際志向が強い層

(動機例)

海外に対する漠然とした憧れがあつた、外国人と交流したかつた、海外で生活をしたかつた、海外で仕事をしたかつた、語学力を強化したかつたなど

③社会貢献志向が強い層

(動機例)

社会貢献したかつた

④動機があいまいな層

そしてこれら動機別のエンプロイアビリティに関する以下の調査事項については、動機が明確な層(①～③)と動機が不明確な層(④)とでは明らかに差があることが判明している。

ア)「帰国後の就職活動時に海外体験が評価されたか」

イ)「現地でどのような能力・資質が向上したか」

ウ)「海外体験が就業に発揮できているか」

さらには、イ)において向上した能力・資質が多いほど、ウ)の発揮度合いが高くなっていることがわかっている。

H26年度調査の対象は、Global ACEのサポート対象外の海外体験者であるため、渡航動機がそのまま現地生活の過ごし方や帰国後の就職活動に影響したとも解釈できる。

Global ACEの支援対象者の中には渡航動機が不明確な者もいるが、キャリア・コンサルティングを受けるなかで、目的が明確になり、非常に有益な海外生活を過ごし、就職に成功しているケースも少なくない。

H26年度調査でも、「④動機があいまいな層」は全体の4割程度いるため、動機(渡航を思い立ったきっかけ)もさることながら、それをふまえたうえでどんな「目的」を設定するかが非常に重要であると思われる。

帰国後にありたい自分の姿を明確にイメージすることで、現在とのギャップを認識し、それを埋めるために現地で何をすべきかが明らかになれば、能力開発へのモチベーションも向上するであろう。

具体的な目標も主体的に設定できるようになるであろう。キャリア・コンサルタントの支援を受けければより正しい目標設定ができ、無為に時間を過ごすことも防げると思われる。



3. 現地生活について

渡航前に立てた目的や目標を念頭に、現地での機会を存分に活用して、限りある滞在期間のなかでできるだけ多くの体験を積むことが肝要である。そのためには日常がマンネリ化しないよう、1ヶ月単位ぐらいでPDCAサイクルを回し、常に目標に向けて取り組むという姿勢が求められる。時折、そもそも渡航目的も振り返ることで初心に戻ることもモチベーション維持には有効である。一方で、現地の状況に応じて、目標を柔

軟に変えることも時として必要である。

キャリア・コンサルタントからのフィードバックを受けることで自己成長感を感じることも重要である。その自信が次のアクションのエンジンとなり、また大きく成長するという好循環が回り始めるであろう。

日々が充実してくるとあっという間に帰国時期が迫ってくるが、帰国前にできることから就職活動の準備もしておくと安心である。



4. 帰国後について

帰国すると日本への見方が変わることも少なくない。海外と比較することで日本の特徴を客観的に見ることができるようになる。自分の成長を振り返り、どのようなキャリア形成をしたいのか改めて内省したり、キャリア・コンサルタントと一緒に考えることで就職への道が開かれてくる。

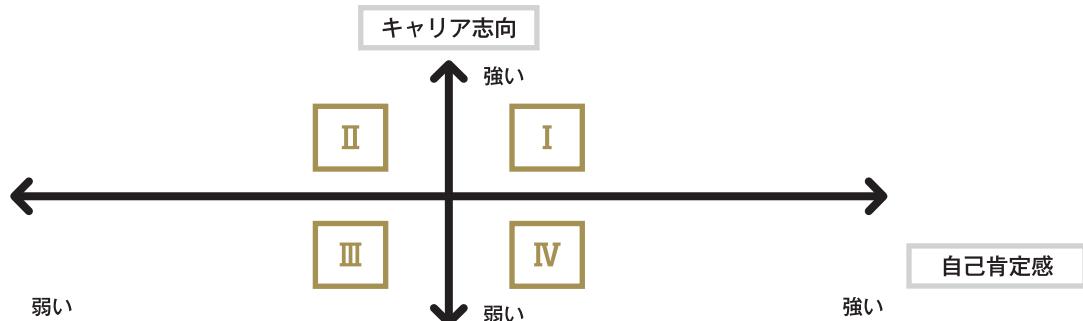
一方、逆カルチャーショックで、就職活動へのエンジンがかかるまでに時間を要するケースも見受けられる。アクションが遅れるとそれだけ不利になることは過去の調査でも明らかであるため、1人で悩まずにキャリア・コンサルタントに相談するなどして、自分を鼓舞する動きが求められる。



5.キャリア・コンサルティングについて

「海外体験を活かしたキャリア形成事例分析(平成25年度版)」の中で、以下のような渡航者タイプに応じた

関与スタンス例を提示した。



渡航者タイプ	CCの関与スタンス
I	「見守り型」本人の意思を尊重し、困った時や迷った時に手を差し伸べる。
II	「応援型」本人のキャリア志向を尊重し、スキルやマインドの承認を徹底する。
III	「けん引型」全面的に支援し先導する。
IV	「開眼型」キャリア志向へ開眼するよう仕事への意識醸成を図る。

今回は便宜上、4タイプに分けているが、もちろん唯一の分類ではなく、他にも分け方はあり得るし、さらには職歴や渡航動機などの他の要素も加わると、渡航者は十人十色である。各自に適切なキャリア・コンサルティングを行うだけの技能が必須であるだけでなく、渡航前～帰国後までの期間にわたりコーチとして併走し、相手を承認しながらも時には叱咤激励するなども求められる。

そのため深い信頼関係があつて初めて有益なコンサルティングが成立する難しい側面もあるのは事実である。ゆえにコンサルタント自身が職業人としてのロールモデルになるぐらいの気概で接することが肝要であるし、そうすることで支援対象者のキャリア意識や自己肯定感を高めることにもつながると思われる。

おわりに

今回の事例分析では、当事業の2年間の実績を集約すべく、様々なソースから情報を取り集めました。

支援対象者の立場やキャリア・コンサルタントの立場などから好事例を分析し、海外体験を通じたキャリア形成の在り方について、一考察ではありますが、整理することができたと思っております。

一方で、反省事例からは課題も浮き彫りになってきましたので、今後の支援の在り方を検討する上で真摯に受け止め、活かしていく必要性を感じております。

当事業では年間300名以上の渡航者に支援を行っておりますが、事業の対象は、支援者本人だけにとどまりません。この事例分析や実態調査研究などで得られた知見の普及を通じて、より多くの渡航者や送り出すエージェント、帰国後の就職をサポートする全国のキャリア・コンサルタントなどの参考となることで、事業の成果が計られると考えております。

そして、受け入れる企業に対しても、海外就業体験者への理解促進や、採用および活用にあたっての参考情報となれば幸いです。

ワーキング・ホリデーだけでも年間2万人の若者が海外で貴重な体験をしてきております。海外インターンシップや海外ボランティアなども含めると、海外就業体験者は相当な数に上ります。中小企業も含め日本企業のグローバル展開が加速したり、2020年の東京オリンピックを契機に来日外国人の数も急増するなかで、国内外で海外就業体験者が活躍できる機会は一層増えてくることでしょう。

次世代を担う若者がグローバル人材へ成長するための支援と、彼ら彼女らを受け入れる社会づくりがますます求められてくると感じております。

補足資料

資料
1

◦ 企業が求める能力・資質

資料
2

◦ 就職成功までの軌跡（補足）

企業が求める能力・資質

まず、社会人基礎力（経済産業省の提唱）や産業界が求める人材像（労働政策研究・研修機構の調査）などをふまえ、若年者が海外就業体験で習得できる能力（H16年度厚生労働省委託調査）に基づき、企業が求める能力・資質に見合ったGlobal ACE独自のコンピテンシー（海外就業体験版）を定義した。

1 社会人基礎力

社会人基礎力とは、経済産業省が2006年から提唱している能力で、「前に踏み出す力」「考え方」「チームで働く力」を柱に12の能力要素から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として定義されている。

■前に踏み出す力：一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力

- ・主体性：物事に進んで取り組む力
- ・働きかけ力：他人に働きかけ巻き込む力
- ・実行力：目的を設定し確実に行動する力

■考え方：疑問を持ち、考え方

- ・課題発見力：現状を分析し目的や課題を明らかにする力
- ・計画力：課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
- ・創造力：新しい価値を生み出す力

■チームで働く力：多様な人々と共に、目標に向けて協力する力

- ・発信力：自分の意見をわかりやすく伝える力
- ・傾聴力：相手の意見を丁寧に聞く力
- ・柔軟性：意見の違いや立場の違いを理解する力
- ・状況把握力：自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
- ・規律性：社会のルールや人との約束を守る力
- ・ストレスコントロール力：ストレスの発生源に対応する力

2 産業界が求める人材像

競争が激しいグローバル時代のなかで、企業が若年者に求める資質は、主体性や高いコミュニケーション能力、創造性、チャレンジ精神などが挙げられている。

（データの出典：独立行政法人労働政策研究・研修機構2011年調査、回答3,392社）

■企業が若手社員の採用にあたり、最も求めている能力

- ・指示されたことだけでなく、自ら考え方行動することができる（78%）
- ・コミュニケーション能力が高いこと（65.7%）

■従来と比べて必要性が大きく増している能力・人材

- ・自社にない新しい発想を持った人材

- ・チャレンジ精神があること
- ・柔軟な発想がされること
- ・語学力があること

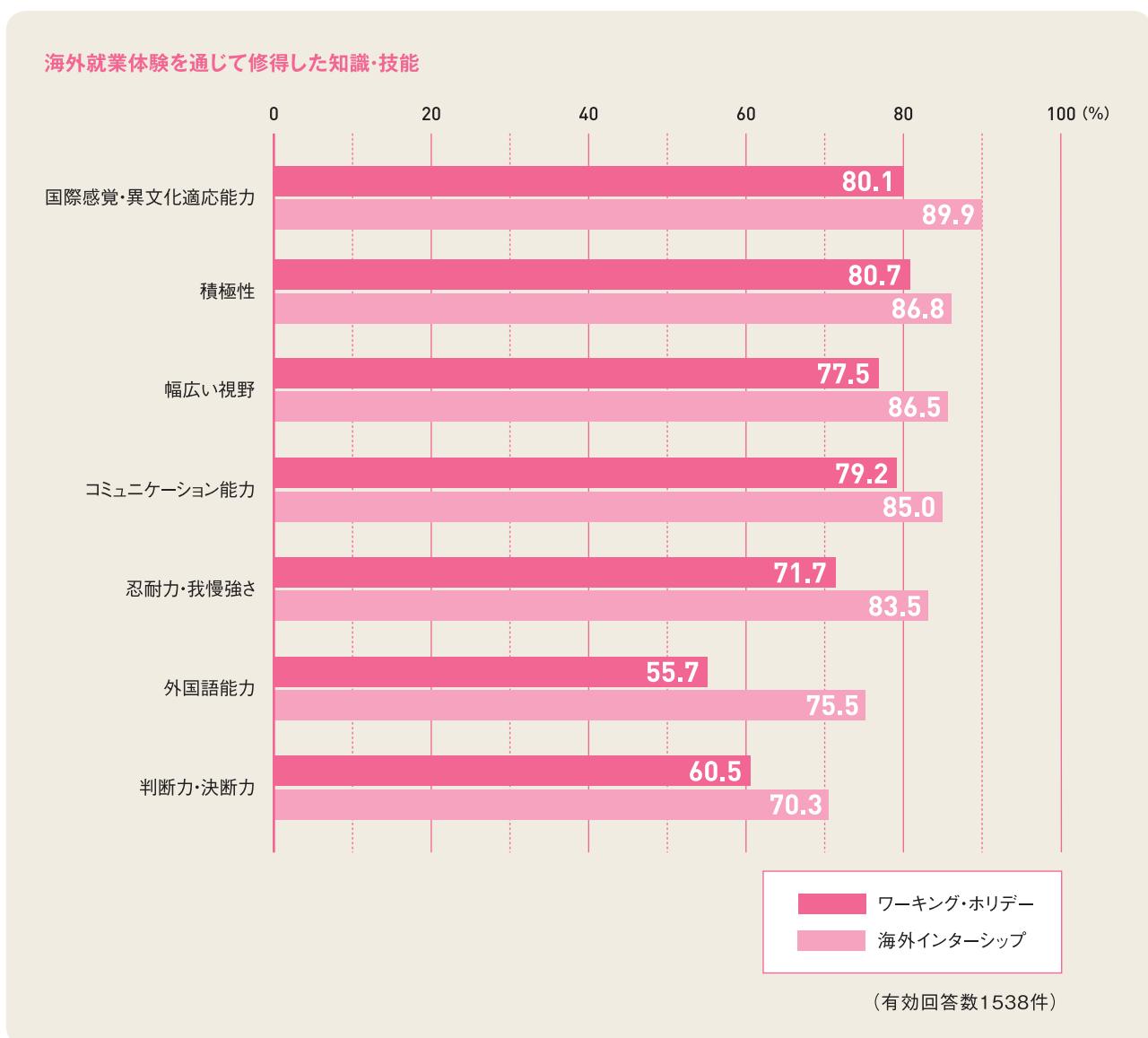
■「失敗や困難があってもやり遂げようとする意思が強い」と感じる企業の割合(世代別)

40代以上:62.4%、30代:36.0%、20代:8.8%

※企業では、若い世代ほど失敗や困難への耐性が極端に弱くなっていると感じている。

3 海外就業体験を通じて習得した能力・資質

平成16年度に厚生労働省の委託事業として実施された「海外就業体験が若年者の職業能力開発・キャリア形成に及ぼす影響に関する調査研究」の結果、海外インターンシップやワーキング・ホリデーなどの海外就業体験を通じて習得したと多くの者が自覚した能力・資質は、「国際感覚・異文化適応能力」「積極性」「幅広い視野」「コミュニケーション能力」「忍耐力・我慢強さ」「外国語能力」「判断力・決断力」などであった。



就職成功までの軌跡（補足）



インタビュー回答者一覧

氏名	年齢※	性別	出身地	参加プログラム	渡航先（国・地域）
H・K氏	28歳	女	大阪	ワーキング・ホリデー・語学研修など	カナダ バンクーバー・カルガリー
O・M氏	29歳	女	東京	語学留学、専門学校、 インターンシップ	カナダ バンクーバー
S・A氏	26歳	女	京都	ワーキング・ホリデー	カナダ トロント
M・E氏	27歳	女	東京	ワーキング・ホリデー・ 語学研修など	カナダ ピクトリア

※年齢は帰国時点



日本でできない経験と 英語力を強みに、 満足できる就活ができた。



H·K氏のプロフィール

年齢

28歳

性別

女性

出身地

大阪

参加プログラム ワーキング・ホリデーなど

渡航先



カナダ(バンクーバー・カルガリー)

考察

- ワーキング・ホリデーに加えて、学生ビザで延長して英語力を強化し、日本で英語が使える仕事を得ることができた。
- 就職に対する意識が漠然としていたなかで、Global ACEのサポートによって就職へのモチベーションが高まった。
- 就職支援セミナーに参加したことで、自己肯定感が高まり自信がついた。



1. 渡航前

(1) 渡航動機

前職を退社後、転職を考えた時に、日本ではできない体験をしつつ、英語力を磨くことができるワーキング・ホリデーに参加すれば、この経験を活かして、転職活動を有利に進めることができると思った。

(2) 前職(業種、職種)

アパレル関係。総務、営業アシスタント。業務内容は、仕入先からの製品の検品、在庫管理、商品の陳列・整理、取引先への納品、受付・電話応対など。決められた業務を一貫して行うのではなく、人手が足りない部署を補助するという社内方針だったため、幅広い業務に携わっていた。そのため、臨機応変に対応することの難しさを知ると共に、効率よく仕事を進めようとする姿勢が身に付いた。

● アルバイト(6ヶ月)

インターネットを使ってバンクーバー以外の場所で仕事を探した。カルガリーへ移り、空港の土産物店などで働いた。色々な国の人々が買い物に来るので積極的に話す機会を作った。

● ボランティア活動

インターネットで探し、マラソン大会のボランティア(最後にメダルを渡す係)を経験した。

● フーム

農業体験をしながら宿泊費は不要というWWOOFステイなどをした。日本人は自分一人だったので英語環境に入れて良かった。野菜の収穫の仕事も仲間とお喋りしながら採れたて野菜を食べたりして楽しかった。

● 現地大学生との交流

カルガリーの大学のジャパニーズカンバセーションクラブに参加し、現地で日本語を学ぶ学生と交流した。友達ができて今でも連絡を取り合っている。

● 旅行

人生最後のチャンスと思い、じっとしていることはなかった。一人でカナダ国内を西に東に旅行したほか、最後にラスベガスやグランドキャニオンにも旅行した。

(2) 居住環境

● ホームステイ

安心感があった。

● シェアハウス

なるべく現地の人々と一緒にシェアするようにした。



2. 滞在中

(1) 活動内容

● 語学学校(通算7ヶ月)

渡航先のバンクーバーで語学学校に4ヶ月通った。仕事を探してカルガリーに移った後、カルガリーの大学付属の語学学校(ESL)を日本人の留学カウンセラーに紹介してもらい、3ヶ月さらに英語を学んだ。



3. 帰国後の就職活動

(1) 就職活動の方法

就職サイトを調べたり、ハローワークにも行った。就活準備として、TOEICと英検の資格を取った。

(2) 海外就業体験をどうアピールし、何が評価されたか

語学面は、渡航前はさほど自信はなかったが、カナダ生活で自信がついたのでアピールしようと思った。英語での接客ができることもアピールした。TOEICと英検の資格も取っておいたので評価されたと思う。

(3) 帰国後から就職決定までに要した期間

半年。

(4) 就職活動の満足度とその要因

満足。努力できるところ、真面目なところが強みになったのだと思う。中途採用は即戦力が求められているので、経歴、学歴重視の傾向にあるが、自分が採用された特許事務はこれまで経験のない仕事なので、必ずしも経歴だけで判断されたわけではない。



4. 就業状況

(1) 現在の業種、職種

特許事務所。弁理士の先生につく秘書、事務業務。海外の特許申請書については翻訳専門のスタッフがいるので、自分は英語でのメールのやりとりや電話応対などを行っている。

(2) 海外就業体験が仕事にどのように活かされているか

語学力が活かされている。顧客は日本の企業だが、特許を取る国がアメリカや中国など海外の場合、英語の文書でやりとりする。英語の電話を取次ぐこともある。スタッフは皆英語ができ、入社資格がTOEIC750点以上。英語でのコミュニケーションはなんとかなるという自信も活かされている。

(3) 海外就業体験を今後どのように活かしていきたいか

今後、ツアーガイドのような仕事もしてみたいと思っている。



5. Global ACEのサポートについて

帰国後の就職支援セミナーがとても役に立った。やる気が湧いて自信もついた。自分の渡航目的は漠然としていたので渡航前から参加していたら、より具体的な目的を持って日々過ごせたのだろうと思う。



カナダでじっくりと 専門力を養い、 帰国後のキャリアアップを実現。



O・M氏のプロフィール

年齢

29歳

性別

女性

出身地

東京

参加プログラム

語学学校、専門学校など

渡航先



カナダ(バンクーバー)

考察

- 社会人を経てカナダに留学し、語学学校、2校の専門学校、インターンシップなどで4年半滞在した。その経験を活かし、帰国後、医療機器メーカーの輸出入部門に就職。英語と貿易の専門知識を活かせる仕事に就くことができた。
- 何社も面接で「4年間もよく遊んできたね」と言われるなど、日本の企業側の海外就業体験者に対する認識はまだまだ偏っている現状もうかがえる。
- 自分を過小評価しがちだが、担当のキャリア・コンサルタントから「そんなことはない」と背中を押してもらい、就活中不安な時は特に心強かった。



1. 渡航前

(1) 渡航動機

小さい頃からのおこがれとキャリアアップを見据えての渡航。

(2) 前職(業種、職種)

生命保険会社に正社員として就職し、営業職をしていた。外交員だったので契約が取れないと給与に大きく影響し、厳しい仕事だった。

● インターンシップ(6ヶ月)

インターンシップ先は学校紹介ではなくて自力で探す。有料の斡旋会社に頼み、オーガニックの輸出工場でのインターンシップに就いた。仕事の内容は、バイヤーや品質管理の手伝い。アメリカや海外に電話して、オーガニックの原材料のサンプルを取り寄せたりしていた。

● ビジネス専門学校(6ヶ月、インターンシップ6ヶ月、ワークビザ1年)

カナダにもう少し滞在したかったので、インターンシップと履修後1年のワークビザが付いているビジネスマネジメントの専門学校に入学した。

● インターンシップ(6ヶ月)

有給のインターンシップをオンラインで探して履歴書をかなり出した。三次面接までクリアした品質証明書発行の会社で、期限付きではない採用をいただけた。有給業務として、豆を輸出入している会社に豆のグレードを付けた品質証明書を発行する業務を担当。アシスタントではなく、責任ある仕事を任された。

● ワークビザでの就業(1年)

事務職、クリスマスシーズンのパッキング業務の他、接客も経験したかったのでカフェ勤務などをし、1年間カナダで働いた。



2. 滞在中

(1) 活動内容

語学学校と2校の専門学校とインターンシップ、ワークビザなどで約4年半、カナダに滞在した。

● 語学学校(通算6ヶ月)

貿易の専門学校の試験に通るまで、バンクーバーの語学学校に半年通った。

● 貿易の専門学校(1年6ヶ月)

貿易関連の知識を包括的に学んだ。経済、マーケティング、法律など8教科のテストに通つたらFITTという資格がもらえる。この学校には半年のインターンシップが付いていた。

(2)居住環境

●ホームステイ（語学時代）

自分と同じ歳くらいの男の子と女の子のいるフィリピン人の家庭。ホームステイは自分だけだったので家族の一員として打ち解け、今でも連絡を取り合っている。

●シェアハウス

ホームステイの後はほとんどカナダ人とのシェアハウスで生活。カナダ人とシェアしたかったので意図的にカナダ人のシェアメイトを探した。

3. 帰国後の就職活動

(1)就職活動の方法

インターネットで人材エージェントに登録した。履歴書は担当のキャリア・コンサルタントに質問しながら、きれいな日本語に添削してもらった。面接対策は、聞かれそうなことをインターネットで調べて答え方を勉強した。TOEICも受験した。

当初は貿易事務系を探していたが、友人が今の医療機器の会社の求人を教えてくれた。海外とのやりとりもあり、英語も使えるため就職を決めた。

(2)海外就業体験をどうアピールし、何が評価されたか

履歴書のほかに、職務経歴書を作り、自分のやってきた仕事を記載した。

面接の時、直属の上司になる人が自分の働いた品質証明書発行のアメリカの会社を知っていて、「大変だったでしょう」と苦労を理解してくれた。カナダではすごく大きい会社で、その会社とも取引があると言っていた。

(3)帰国後から就職決定までに要した期間

2ヶ月。

(4)就職活動の満足度とその要因

これまで何社も面接で「4年間もよく遊んできたね」と言われて嫌な思いをしたが、直属の上司がきつい品質証明書の会社を知っていたので、この会社で初めて自分の苦労を理解してもらえた。それがすごく嬉しかったし、ご縁を感じた。

4. 就業状況

(1)現在の業種、職種

日本の医療機器メーカー。配属は、輸出入関連の営業アシスタント。日本語と英語半々の業務で、機器の問い合わせの応対、社内外に出す和訳翻訳業務。貿易の知識も使える。

(2)海外就業体験が仕事にどのように活かされているか

カナダの友達や現地で出会ったブラジル人の同じ境遇（帰国したら就活をする）の友達が、賢く前向きに生きていて、自分の甘さを知った。海外生活で視野が広がり、精神的にへこんでも「道は一つではない」「だめでも違う道がある」ことを学んだ。度胸がついたので変に動じることもなくなり電話応対も問題なくこなせる。

(3)海外就業体験を今後どのように活かしていくいか

母体が大きな会社なので、今後グローバル展開することがあれば、カナダで学んだ貿易の知識を活かして貿易の実務に携われたらと思う。

5. Global ACEのサポートについて

帰国後10日目くらいで、海外体験評価シート、キャリアシートに記入してのコーチングを受け、海外就業体験の棚卸しをした。シートの記入は自分だけでは難しかったので担当のキャリア・コンサルタントに指導してもらえて良かった。伸びた能力の要因などが明確にわかり、カナダで働いたことを客観的に見ることができた。

自分がやってきたことはたいしたことはないと過小評価しがちだったが、そんなことはないと背中を押してもらえて就活への勢いと自信を得ることができた。また、興味のありそうな仕事を提案いただいたり、自慢げにならずに自己PRできる方法を教えてくださるなど、色々と相談に乗ってもらえてとても心強かった。



渡航体験をしっかりアピールし、 公務員の就職を勝ち得た。



S・A氏のプロフィール

年齢

26歳

性別

女性

出身地

京都

参加プログラム

ワーキング・ホリデー

渡航先



カナダ(トロント)

考察

- 英語力、生活力をさらに高めるためにワーキング・ホリデーを選択し、帰国後は公務員という進路をはっきり決めて、就職活動を成功させた。
- 公務員の面接で、カナダでの滞在について多く聞かれたこと、それに対して自己アピールがきちんとできた。
- 担当のキャリア・コンサルタントが、帰国後、コーチングでの話をエントリーシートにたくさん盛り込んでくれたおかげで、自分の力では成しえない説得力のあるものができあがった。このシートのおかげで公務員の就職を勝ち得た。

1. 渡航前

(1) 渡航動機

海外で働くこと、現地の学校に通って英語環境で生活することで、自分の英語力や生活力を高めようと思っていた。大学在学中に実現できなかったため、卒業後にワーキング・ホリデーに行こうと決めていた。また、様々な人種の人と関わりたいと思い、多くの移民の方がいるカナダを渡航先に選んだ。その中で視野を広げていくことも目的とした。

2. 滞在中

(2) 前職(業種、職種)

大学院を卒業後、インターネットショップのスタッフとして1年勤務。カスタマーサービスと営業を担当していた。カスタマーサービス課では、電話・Eメールでの顧客対応およびデータ管理・事務作業を、営業部ではインターネットショッピングのサイトの作成および運営を行った。

業務を通じて、エクセルの使い方、ウェブサイトの運営の仕方・仕組み、簡単なウェブサイトの作成方法などを習得した。

(1) 活動内容

- 語学学校(2ヶ月間)
渡航前から、英語は人並みに話せた。
- トロントにある日本人向けの補習授業校での理科教員のアルバイト(7ヶ月)

現地に住む日本人の生徒に対し、週に一度日本語で「日本で学ぶ内容・レベル」の授業を行った。小学校3年生、4年生の理科を担当し、生徒数25名のクラスを4クラス受け持った。週に一度しかない時間内で、生徒にもわかりやすく、興味を持ってもらえる授業になるように計画を立てた。また、行事部に所属し、学校行事の運営・企画なども行った。

(2) 居住環境

● ホームステイ

- カナダ人(夫)とグアテマラ人(妻)の夫婦の家に、韓国人留学生と二人でホームステイした。
- シェアハウス



3. 帰国後の就職活動

(1) 就職活動の方法

滞在中に父親から公務員が向いているのではと言われて、自分でもそう思っていたので、帰国後、1ヶ月公務員試験の勉強をした。

公務員になるまでの仕事をハローワークに行って探し、1年契約で大学の図書館司書の仕事に就いた。その仕事をしながら公務員試験の面接を受けた。

(2) 海外就業体験をどうアピールし、何が評価されたか

公務員試験の面接では、カナダでの滞在のことについてばかり聞かれた。

アピールしたのは、カナダでのアルバイトで日本人学校の先生やカフェの仕事に就けたこと。何十倍という倍率のうえ、通常は履歴書を出しても3～4ヶ月連絡がなく、履歴書で落ちる人が多いなか、自分は仕事をもらえたことをアピールした。

英語については、海外生活を通じてリスニング、会話力が伸びたこと、話すのも躊躇しなくなったことをアピール。また、精神的に強くなり自信を持てるようになったところもアピールした。

(3) 帰国後から就職決定までに要した期間

4ヶ月。

(4) 就職活動の満足度とその要因

満足している。成功の要因は、公務員になりたいという思いと就職活動の勢いではないか。



4. 就業状況

(1) 現在の業種、職種

1年間契約で大学の司書。2015年4月1日から公務員。

(2) 海外就業体験が仕事にどのように活かされているか

現在の契約社員としての仕事では、留学生の図書館案内や、国際学部でデータベース検索についての講義を英語で週3回の頻度で行ったこともある。

海外で日本語を教えた経験から、人前で話すのも恥ずかしくなく自信を持ってできた。また、講義の内容を作成する経験も活かせた。

(3) 海外就業体験を今後どのように活かしていきたいか

自分は子どもが好きで、お金儲けには興味がないので公務員が向いている。自分が学んだことや良かったことを後世の子どもたちに伝えたいという思いがあり、将来的には教育委員会で働きたいと願っている。英語を使える職種で、小学生の英語教育などグローバル化に向けて

の教育に携われればと考えている。



5. Global ACEのサポートについて

●滞在中のサポートについて

目的意識の向上と能力開発の促進に役立った。担当のキャリア・コンサルタントからは、強化したい能力が目標に達すると、まだ伸びていない能力の強化を提案され、具体的な日々の努力例を教えてもらい、充実した生活を送ることができた。能力の5段階評価も自分で採点すると低くつけてしまうが、コーチングで話を聞いてくれ、「それならもっと高い評価だ」と認めてもらって自信にもなった。月に1度のスカイプコーチングが監視役となつたので、サボれないし、しっかりやろうと思えてとても有効だった。

●帰国後のサポートについて

帰国して3週間後に、海外体験評価シートやジョブ・カードを使って海外体験を振り返り、強化目標とした能力の伸び具合などを評価した。記憶が鮮明だったので良かった。自分の簡単なPR文や志望動機に、キャリア・コンサルタントがコーチングの話をもとに肉付けしてくれて素晴らしいエントリーシートが完成した。公務員の就職を勝ち得たのもエントリーシートのおかげだと思っている。



英語を活かす 専門的な仕事をこころざし、 留学カウンセラーとして歩み始めた。



M・E氏のプロフィール

年齢

27歳

性別

女性

出身地

東京

参加プログラム ワーキング・ホリデーなど

渡航先



カナダ(ビクトリア)

考察

- 留学とワーキング・ホリデーの経験、そしてキャリア・コンサルタントに気付かされた自分の適性を活かし、留学カウンセラーになることを決意してその道を歩み始めた。
- 会社の処遇面などに対する満足度は低いものの、自らの海外経験をそのまま活かせる仕事には満足し、より良い仕事をするために表現力を磨こうと日々精進している。
- 担当のキャリア・コンサルタントへ絶大なる信頼を寄せ、多くの気づきを得るだけでなく、一緒に就活をしてくれているという安心感から何ひとつ不安なく就職活動を乗り越え、現職に就くことができた。

1. 渡航前

(1) 渡航動機

大学3年の時に私費で半年間、カナダのビクトリア州に語学留学した。社会人になり、英語を使う仕事をしていたが、英語力をさらに伸ばしたいと考え、カナダにもう一度行きたいと考えていた。

また、自分にしかできない仕事、英語を極めた専門的な仕事に就きたいと強く思い、年齢的にも30歳を過ぎると女性は就職が厳しいと聞いていたので、早めに海外に行き、帰国後正社員として働くことも視野に入れて決断した。

(2) 前職(業種、職種)

通信機器メーカー。営業で4年2ヶ月勤務。主に韓国の顧客に販売。営業、技術などに関する全ての問い合わせ窓口として数社を担当していたため、営業業務のメインである価格交渉や新規案件入札だけでなく、製品技術や海事法など幅広い知識を身に付けた。

2. 滞在中

(1) 活動内容

- 語学学校(3ヶ月)
ビクトリアの大学付属の語学学校で英語を学んだ。
- ボランティア活動(1ヶ月)
自治体運営の古着屋でのボランティア。レジと洋服の仕分けを担当。ボランティアで販売経験を積めば面接でもアピールができるので、それを目的に働いていた。
この他、ホームレスの人々の生活を支援するボランティアも行った。
- アロマセラピー・お茶を扱う店の販売員(8ヶ月)
自己PRもでき、販売員の仕事に就くことができた。従業員は自分以外全員カナダ人。カナダはお客様が入ってくると、会話して売り込むことが要求される。英語力が不安だったが、専門用語の資料を読み込んだり、「できる」と思い込んで積極的に話しかけていたら、自然とできるようになっていった。また、ワークショップをする機会もあったので、渡航前に習った茶道でお客さまにお点前を披露することもできた。

8ヶ月という短い期間ではあったが、英語や製品の勉強などを毎日必死に行った結果、カナダ人の同僚と同等

の仕事をすることができた。いつでもポジティブに考え、行動することの大切さを学んだ。

●旅行(1ヶ月)

(2)居住環境

●ホームステイ(1年)

1年間同じカナダ人ファミリーのところでお世話になった。日本人のことを良く知っている家族で、夕食もお米が出て一人暮らしより楽だった。コンサートにもたくさん連れて行ってもらった。



3. 帰国後の就職活動

(1)就職活動の方法

進路については、留学カウンセラーに私自身が助けてもらったことがあり、同時に残念な思いもしたことで、自分が留学カウンセラーになって誠心誠意サポートしたいと考えていた。

就職活動の準備として、カナダにいる間にTOIEC900点以上の目標を達成し、帰国して英検準一級に合格。担当のキャリア・コンサルタントとは面接練習も行った。インターネットで就活サイトに登録し、留学カウンセラーの求人を探した。ハローワークも利用した。

(2)海外就業体験をどうアピールし、何が評価されたか

留学カウンセラーは営業の仕事もあるので、カナダのアルバイトでお客さまに積極的に売り込んだ話、アルバイト先のお茶屋のパンフレットを自ら作成し、現地の日本のエージェントに配布した話をして積極性をアピールした。併せて現地のエージェントの様子を伝えたので、留学カウンセラーとして適任である印象を与えられたと思う。

(3)帰国後から就職決定までに要した期間

1ヶ月。

(4)就職活動の満足度とその要因

満足できる点は、自分が留学した経験がそのまま活かせること。特に、勤務する留学会社の海外支社がある2カ所の町には、いずれも住んだことがあり、就職できた要因の1つだと思う。



4. 就業状況

(1)現在の業種、職種

留学エージェント、留学カウンセラー。高校生の留学を担当している。

(2)海外就業体験が仕事にどのように活かされているか

ビクトリアの高校から留学生が来日するが、同行して通訳をするなかでカナダでの体験を共通の話題にしたり、英語力も活かせている。

(3)海外就業体験を今後どのように活かしていくいか

担当は高校留学なので、親御さんに安心してもらえるように、自分の留学体験を活かすこと以上に、お客さまに伝える力、表現力を身に付けたい。カナダでの生活のイメージが湧いて親御さんと留学生が安心できるくらい表現力豊かに具体的な話ができるようになりたい。

将来、英語を使って翻訳業務をしたり、オリンピックで外国人客が来日した時に英語でサポートしたい。通訳ガイドにも興味はあるが、より安定した公務員が良いとも考えている。



5. Global ACEのサポートについて

●滞在中のサポートについて

不安な時、担当のキャリア・コンサルタントにメールするとすぐに返信があり、スカイプで話ができた。まず話を聞いてくれてから励ましてもらえて、不安も吹き飛んだ。とにかく親身に話を聞いてくれて最高のサポートだった。2日間連続でスカイプで面接練習をしてくれたり、一緒に求人を探してくれた。一人で就活しているというより、キャリア・コンサルタントも併走してくれているという安心感がすごく強かった。

●帰国後のサポートについて

帰国2週間後に、海外体験評価シートに記入してキャリア・コンサルタントと会った。自分で気付かない点を教えてもらい就職活動に役に立った。

カナダで英語を伸ばしたいから選んだ接客の仕事も、「接客販売が好きでなければ選ばない仕事」とコメントしていただき、自分がお客様と接する仕事がしたいことに気付かされた。

また、留学カウンセラーとして「お客様のためにこんなことができる」と営業の視点で自己PRすると良いと教わり、役に立った。

就職活動中もキャリア・コンサルタントと話をするだけで元気になり、エネルギーをもらった。現在取り組んでいることをポジティブにほめてくれて、どんなことも遠慮なく話せた。特に諦めたくなった時は、キャリア・コンサルタントがなんでも聞いてくれて一緒に就職活動をしてくれたので、その安心感でモチベーションを保った。

海外体験を生かした キャリア形成事例分析

[平成26年度版]

発 行 日 平成 27 年 3 月

編集・発行所 一般社団法人 海外留学協議会 (JAOS)
〒162-0825 東京都新宿区神楽坂 6-46 ローベル神楽坂 7F
TEL: 03-3269-8446
FAX: 03-3269-8447
<http://www.jaos.or.jp>

JAOS 一般社団法人
海外留学協議会
Japan Association of Overseas Studies

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂6-46 ローベル神楽坂7F
TEL: 03-3269-8446 FAX: 03-3269-8447
E-Mail: info@jaos.or.jp
<http://www.jaos.or.jp/>



Global ACE

Global Action for Careers and Employability

<http://www.global-ace.jp/>